

第30回SGRAフォーラム

教育における『負け組』を
どう考えるか

～日本・中国・シンガポール～



SGRA

関口グローバル研究会

■フォーラムの趣旨

S G R A 「グローバル化と地球市民」研究チームが担当する6回目のフォーラム。

グローバル化の中で、漢字文化圏を中心に教育の大競争が起きている。激しい受験戦争に勝つのはほんの一握りの人たちであり、不利な立場に立たされた「負け組」はどうなるのか。教育こそが下から上にあがるための武器となるべきものであるのに、それが機能しているだろうか？このような問題意識を持ちながら、日本、中国、シンガポールの教育事情を紹介し、教育格差の問題にどう取り組めばよいのかを考える。100人いれば100の教育論があると言われるが、このフォーラムではデータに基づく研究を紹介した後、皆さんと一緒に教育格差の問題を考えたい。

■S G R Aとは

S G R Aは、世界各国から渡日し長い留學生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化に立ちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。S G R Aは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがS G R Aの基本的な目標です。

■S G R Aかわらばん

S G R Aフォーラム等のお知らせと、世界各地からのS G R A会員のエッセイを、毎週2回（火・金）、電子メールで配信しています。S G R Aかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、S G R A事務局にご連絡ください。

プログラム

第30回SGRAフォーラム

教育における『負け組』をどう考えるか

～日本・中国・シンガポール～

日時： 2008年1月26日（土）

午後2時30分～5時30分、その後懇親会

会場： 東京国際フォーラム ガラス棟G610会議室

14時30分

開会挨拶

今西 淳子（SGRA代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）

総司会：林 少陽（東京大学教養学部特任助教授、SGRA研究員）

14時40分

発表1

日本の高校にみる教育弱者と社会的弱者

佐藤 香（東京大学社会科学研究所准教授）

日本の教育システムの特徴の1つに、高校・大学におけるきわめて精密な序列化があげられる。とりわけ高校は、教育だけでなく研究や規模・学費など多様な要因から評価される大学とは異なり、学力のみによる一元的な階層構造を形成している。この階層構造を支えているのは、教育機会の均等とメリトクラシー（業績主義）という2つの前提である。そのなかで、高校生たちは、在籍している高校の階層に適応した進路、すなわち進学校であれば威信の高い4年制大学、普通科中堅校であれば中堅大学や専門学校、普通科下位校や専門高校であれば就職といったように、特定の進路に強く水路づけられてきた。また、それぞれの高校には、それらの進路とも結びつくような独自の生徒文化が存在した。けれども、1990年代半ばからの長期にわたる経済不況によって高卒労働市場が著しく縮小したためもあって、従来、就職を主な進路としてきた高校では、生徒の進路保障が困難になった。その一方で、教育システムの外部では社会・経済的な格差が拡大してきている。こうしたなかで、社会・経済的な弱者が教育弱者になる傾向が強まりつつある。報告では、東京近郊にあるA県の公立高校のデータを用いて社会的弱者と教育弱者との結びつきを見た上で、その問題点を指摘する。さらに、教育機会の均等とメリトクラシーという、日本の教育システムにおける2つの前提についても、会場の皆さんと再考してみたい。

15時10分

発表2

中国の義務教育格差～出稼ぎ家庭の子ども達を中心に～

山口 真美（アジア経済研究所研究員）

経済発展が進み、教育の役割がますます大きくなる中国で、制度的に教育機会を奪われている子ども達がいる。都市に住む出稼ぎ労働者の子ども達である。彼らの多くが都市生まれだが、学齢に達しても都市の学校は彼らを受容しては受け入れない。出稼ぎ労働者の多くが子どもの将来に希望を託し、教育を重視しているにもかかわらず、子どもの教育機会は義務教育の入り口で大きな壁に突き当たっている。報告では、この背景にある中国の教育制度と社会制度の問題点を考え、それに対する草の根と政府それぞれの取り組みを紹介する。義務教育における教育格差の問題について、皆さんと共に考えてみたい。

15時40分

発表3**高校教育の日星比較～選抜度の低い学校に着目して～**

シム・チュン・キャット（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

どこの国でも、学校教育段階のどこかで何らかの基準をもとに、生徒を「分化」しなければならない。分化の仕方はさまざまであり、アメリカの高校のように学校内に分化したコースを設ける場合もあれば、多くのヨーロッパの国やシンガポールに見られるように進路によって学校が分かれる場合もある。さらに、日本の高校のように学校間格差という形で生徒をふるい分ける国もある。形態はともあれ、生徒の分化における一番の問題は、下位の学校やコースに振り分けられた、いわゆる「負け組」の生徒の「やる気」や意欲をいかに保つかということである。この点において日本とシンガポールとは大きな違いがあり、その違いを浮き立たせることが本報告の主眼である。

16時10分

休憩

16時20分

パネルディスカッション**教育における『負け組』をどう考えるか**

パネリスト： 佐藤 香 氏（東京大学社会科学研究所准教授）

山口 真美 氏（JETROアジア経済研究所研究員）

シム・チュン・キャット氏（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

進行： 孫 軍悦（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

17時25分

閉会挨拶

嶋津忠廣（SGRA運営委員長）

懇親会：ロイヤルカフェテリア（東京国際フォーラム地下1階）

挨拶

開会挨拶

今西 淳子

SGRA代表、渥美国際交流奨学財団常務理事

皆さま、こんにちは。今日はお寒いところ、また土曜日のお休みの午後にお集まりいただきましてありがとうございます。私はSGRAの代表を務めます今西と申します。

SGRA、関口グローバル研究会の母体は渥美国際交流奨学財団で、日本の大学院で勉強している外国人留学生を奨学支援しています。奨学金が終わった後も、いつまでも関係を保っていこうということでネットワーク作りを始めましたが、余りにも素晴らしいネットワークなのでもっと何かをしようということになり、関口グローバル研究会を設立しました。関口というのは、渥美財団の事務所がある場所の名前で、関口からグローバルに、知日派外国人研究者の声を発信していこうという活動です。

SGRAでは、国内で毎年4回（東京で3回、軽井沢で1回）フォーラムを開催しています。それがまた発展して、日韓相互交流プログラムをしたり、中国でフォーラムを開催したり、マニラでセミナーを開催したりしています。今年の6月にはウランバートルでシンポジウムを共催します。これらは、ほとんどSGRAの役員から提案されたプロジェクトで、私たち事務局が支援するという形で進めています。

今日は、教育システムに真正面からとり組んだフォーラムです。教育問題は、前から取り上げてみたかったのですが、なかなかつかみどころが難しく実現しませんでした。今回、3番目の発表者のシムさんと話して、ようやくこういう形にまとまって、初めての教育フォーラムを開催できることになりました。私個人としても非常に興味あるテーマです。昨年の夏に軽井沢で開催したSGRAフォーラムでは「命の尊厳と宗教の役割」というテーマでしたが、基調講演をしてくださった東大の宗教学の島藺先生が問題提起として出された話がとても印象的でした。大阪で高校生たちが浮浪者を攻撃して殺してしまった。その時一体何が起こったのか。その高校生は成績が優秀ぐらいの子どもだったのですが、なぜ浮浪者を殺したのか聞かれた時に、「社会のごみを掃除したのだ」と答えたというのです。つまり、「社会に役立たないものはもう要らないもの、ない方がきれいなのだ」という考えが彼にはあり、それは、彼の学校や社会環境から学んだものだろうというのです。そのような考え方をもってしまう子どもたちの背景にあるものを考えなければいけないという話が、「命の尊厳」の話のフォーラムでありました。

この事件の背景には、グローバル化に伴ってすべてが効率化してしまった激しい競争社会があると私は思います。特に教育の競争が漢字文化圏の北東アジアで凄いい勢いで進んでいて、それが全世界に影響を及ぼしているのではないかと私は思っています。勿論、この過剰な競争について根本的に考えていくことは必要です。けれども、グローバル化というのはもう止められないものだとすることも確かで、いくらそれが困ったものと言っても仕方がないのであって、もっと現実的な対応も必要です。しかも教育というのは、今子どもたちが育っているわけですから、立ち止まって考えている暇はなく、今何かしなければいけないという問題だと思います。

それで、シムさんには渥美財団の方でお会いしたわけですが、今日発表していただくお話が私にはまさに目から鱗でした。シンガポールはグローバル化の優等生で、非常にうまくグローバル化に乗っている国だと思います。そのシンガポールにおいては、格差についての取り組みを制度的に行っているわけで、是非、フォーラムで発表していただきたいと思っていましたが、ついに今日実現したわけです。



先生方には、お忙しいところ今日お引き受けいただきまして、ありがとうございました。どうぞ、よろしくお願ひします。

発表 1

日本の高校にみる教育弱者と社会的弱者

佐藤 香

東京大学社会科学研究所准教授

本日は日本の高校に見られる弱者の問題をご報告いたしまして、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。トップバッターですので、今日、問題になっております近代教育のシステムと、それを支えているメリトクラシーという理念についてご説明させていただきます。そしてその中で、教育の弱者、負け組に着目する理由、つまり、日本社会における近代教育システムのありよう、そして、理念としてのメリトクラシーが現実ではどうなっているのかということをお話いたします。最後に、焦点を絞った上で、現時点で共有したいと私が考えている問題点を列挙します。しかし、それ以外にも多くの問題点があると思いますので、皆さまからもご意見を伺えればと思っております。

ほとんどの先進国において、近代教育の役割は、社会のあらゆる階層から能力のある人を選抜・育成し、社会に貢献できる人材を育てることにありました。日本の場合、近代化を開始したのは明治時代です。それ以前の、例えば、江戸時代であれば、士農工商という身分がありましたから、身分の枠内で生きていくということが重要で、それを超えて例えば商人が政治をつかさどることは禁じられていました。けれども近代化が始まった後は、たとえどんな貧しい人であろうと、能力さえあればそれを国家が育てて国家が役に立つ人にしなければいけないということで学校制度が広まっていきました。

したがって、近代化以降、学校教育は社会における上昇移動のチャンネルになったわけです。そして、学校教育がチャンネルになったことによって、人々はたとえ下の階層に生まれても、一生懸命努力し勉強

しさえすれば上昇することができる。そういう動機付けがなされたわけです。社会における上昇移動の機会が制限されていることは社会的不平等の発生・持続と密接に関連してしまいます。そうではなく、教育を受ける機会は誰にでも与えられ、教育を受けた結果は平等である — 生まれではなく、各自の努力の結果という意味で — ということが、理念として広がってきたのです。さらに、誰がどこまで上昇するのかは各自の努力とその努力の結果としての業績にかかっており、努力して業績を挙げた人が報われるという社会になったことを意味します。この原理をメリトクラシー（メリット＝業績）といいます。

このメリトクラシーという原理は、社会の中では2つの側面を持っています。1つは受験競争という側面で、これは教育システムの内部にあります。ある学校段階から次の学校段階に行くときに、能力のある人がよりよい教育を受けられるようになるというメリトクラシーです。

もう1つ重要なのは、社会的資源の配分におけるメリトクラシーです。教育を終えてから人は働き始めるのですが、このときにさまざまな資源を手に入れることとなります。例えば、労働の対価としての収入がそうです。それからそれを使った資産、権力、社会的な威信などがあります。そのようなものをまとめて社会的資源といいます。社会的資源を一番手に入れやすくなるルートが職業です。日本では最近薄れたといわれていますが、いい学校を出ればいい職業に就けるといある種の信念のようなものがあります。これはメリトクラシーの原理が社会の中に生きているということです。

そうすると、まず、受験競争という教育システム内のメリトクラシーがあります。そして、学校卒業後に生きていく上で必要な社会的な資源が配分される時にもメリトクラシーがあります。そういうルール — 個人の努力の結果に応じて社会的資源を配分する — で配分していきましょうね、人の一生を決めていくルールをメリトクラシーでいきましょうねということ、社会のみんなが正当だと感じていること、すなわち、このルールは正当であり、かつ、このルールは社会のみんなによって守られるはずという信頼、これが社会を編成する原理としてのメリトクラシーの維持のためには必要です。社会的なルールは、社会の構成員が納得していなければ守られません。では、原理としてのメリトクラシーが流通するのはなぜなのか、それがルールになるのはなぜなのか。それは、努力と業績で評価するということの前提になっている、各人が持っているもともとの能力は平等なのだということが社会の人々によって信じられているからです。さらに言えば、社会の人々がもともと平等に分け持っている能力を各自の努力によって伸ばしていくための「教育の機会」は社会の全ての人々に平等に与えられていなければ、メリトクラシーは正当化されないという点は重要です。

「勝ち組」と「負け組」、「教育の弱者」という言い方はできるのだけれども、「教育の強者」という言い方はできません。教育の弱者はいても、教育の強者はいない。しかし、なぜか「勝ち組」と「負け組」と言わないと、落ち着きが悪い。教育では、だれも本当は勝っていないのだろうな、負ける人はいるけれども勝っている人はいないのだろうなと思いますが、取りあえず対比をつくるという意味で「勝ち組」と「負け組」という言葉を使わせていただきます。本当はこの言葉は品位を欠くと思いますし、好きではありません。けれども、この後の話を分かりやすくするために、2つのグループがいますという形で使わせてください。

上述のように、メリトクラシーが社会的ルールとして流通している社会では、負け組のもらう社会的資源は少なくなります。努力と業績に応じて配分するというルールだから当然の結果です。ただし、今はそれが当然だと思っていますが、数十年前の日本の場合、まだ大学進学率が10%台ぐらいで、高卒で就職する人がほとんどでした。だから、大企業であっても高卒で就職するというルートが保証されていました。そして、高卒であっても、とても努力はしたと思いますけれども、それなりに管理職、役職に就くこともできていたのです。そういう時代だと、就職してから頑張れば出世ができたわけです。しかし今や18歳人口の60%近くが高卒後何らかの学校に進学します。この時代に高卒でも出世ということはほとんどあり得ない。大卒者だけ、若しくは、大勢の大卒者に混ざっての競争になってしまいました。

企業などに雇用されない場合について考えてみると、自分で事業を起こすという働き方があります。規模は小さくても、たとえ10人ぐらいの規模であっても、社長になることができる。景気が良かったときには、こうした中小企業の社長たちはかなり儲けていました。日本の産業の根底には膨大な数の中小企業があり、日本の産業を下支えしてきたのはまさにこれらの中小企業なのです。中小企業を起こしてきた人々は、高い学歴こそ持っていませんでしたが、自分たちの才覚によって社会的な成功を成し遂げました。人々の生き方として、そういうルートもあったのです。けれども、今日のグローバルゼーションの中で、中小企業の経営というのは極めて厳しくなりました。バブルが崩壊した後は、ますます難しく、中小企業数は急速に減少しているのが現実です。そうすると、自営というルートも選びにくくなったわけです。「負け組」であっても、企業に雇用されるか自分で事業を起こすかという生き方が十分に可能であった時代が終わった後の産業構造の変化を考えると、今や、教育の負け組は社会経済の負け組になってしまう、両者がほとんどイコールの時代が来てしまったのが21世紀の日本

社会だと私は考えております。

そして、メリトクラシーの原理から言えば、「負け組」になってしまったのは、あなたの努力が足りなかったからということになります。つまり「自己責任」です。あなたは自分の責任で負けたのよと言われているのが今の日本の社会なのです。この十数年、社会的な格差が広がっているということが話題になっていますが、この「あなたが負け組になったのは自己責任」という社会は、結局は、格差の存在だけではなく格差拡大も容認してしまうのです。

社会的な格差が全くない社会というのはありえませんが、格差をどこまで容認するのかというのは、国によっても時代によっても違います。特に戦後の日本社会は格差を縮小する形で、もう60年くらいずっとやってきているのです。

この格差を縮小するということが、恐らく日本の産業の1つの活力になってきたのです。例えば非常に格差の大きい国では、自家用ジェット機を買う上層と、工業製品をほとんど買うことができない人たちがいます。自家用ジェット機を買う人たちが経済が牽引されるような社会もあると思います。けれども日本の場合、自家用ジェット機を買う人たちもいない代わりに、何も買えない人もいない。例えばカメラを買う。日本のカメラというのは性能

がいいことで有名です。みんながそこそこのものを買う。例えば1億人の人たちがカメラを買います。そうすると、みんな「ここがもうちょっとこうだった方がいいね」「もうちょっとこの方が使いやすいね」ということになる。つまり、日本の人たちがみんなが商品テストをしているようなものなのです。格差が少ないからこそ、かなり優秀な製品が作られ、これが実は輸出しても広く受け入れられる、そういうものをつくってきた。それが日本の戦後の社会だと私は思います。

図1は、メリトクラシー原理によって基底されている近代教育システムのモデルです。これは小学校、中学校までを示しています。日本社会においても、出身家庭の階層が、上層、中層、下層とあります。それらの階層によって家庭の経済力が違います。これらさまざまな階層から、子どもたちが学校に入ってきます。この時点で出身階層とは無関係にシャッフルされます。家庭の経済力とは無関係に、勉強というところだけで競争します。その競争の結果として、上中下ができたとしても、これは出身家庭の階層とは関係がない。これが能力は平等であるということのイメージです。こういう極めて単純なモデルによって私たちは学校教育システムを考えているのです。中学校までは義務教育で、ほとんど公立ですからこの図のようになりますが、私立中学校であっても、大枠はこの図のイメージで考えて支障あ

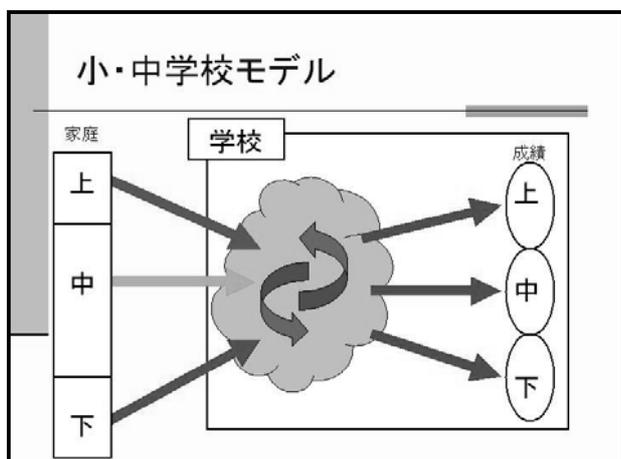


図1

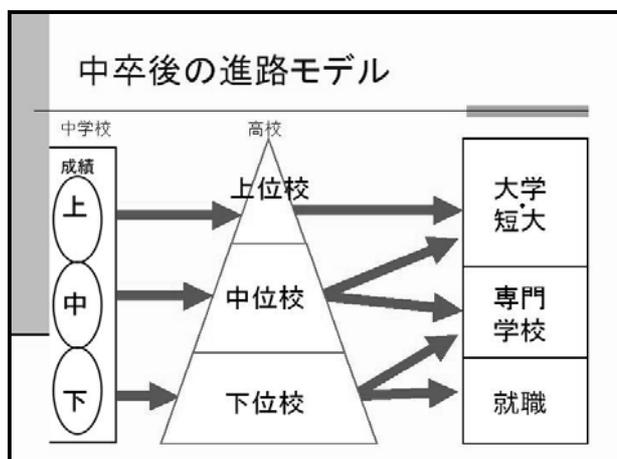


図2

りません。

図2は、中卒後の進路モデルです。日本の高校は極めて厳密な階層構造をなしており、入学試験や入学後の学習内容の難易度に応じて非常に細かくランク付けされています。原則的には、中学校の成績に見合ったランクの高校へ入学していきます。もちろん、各ランク内での競争もあるわけですが、大体このランク付けの上の高校に進学すれば卒業後は大学進学、下の方に行けば卒業後は就職という進路が90年代前半までのルートでした。ところが、バブル崩壊後、高卒者の就職先が減って、学校ランクの下位校から無業者とかフリーターとか言われる若者たちが出てきてしまっています。また、高校進学率が極めて大きくなっているのですが（70年代には90%を超過し、今日では義務教育のような状況になっている）、中学校の成績でその後のルートはほとんど決まり、上下のずれはそんなに起きることがありません。もちろん例外はありますが、大多数の若者たちは今述べてきたようなルートを進んでいくと考えられています。

図3は、2005年に日本全国で行われた、社会学の領域ではとても重要な大規模なSSM（Social Stratification and Social Mobility survey）という調査データから作成しました。30代、40代の男性の「中学校3年生のときの成績」と現在の職業

の関連性を示しました。この「中学校3年生のときの成績」は、確かに主観的なもので、上の方だった、下の方だったという5段階でたずねています。学力試験などの結果による客観的な指標ではなく、あくまで自己評価、自己認識でしかありませんが、回答は上の方、やや上の方、真ん中、やや下、下の方ときれいに分かれています。

さて、上の方だったと回答した人の53%は、現在専門管理職になっています。そして、27%は正規雇用のホワイトカラーです。やや上だったと回答した人は、39%が専門管理、35%がホワイトカラー。真ん中だったら、30%がホワイトカラーですが、29%はブルーカラー。そして、やや下だったと回答した人は、48%、半分近くがブルーカラーです。自営、ホワイトカラーになった人は少数です。そして下の方と回答した人は、36%がブルーカラーです。先ほど見ていただいたメリトクラシー原理によって配分されているということがお分かりいただけると思います。

ところが、図4のように、女性を見るとやや様子が変わってきます。日本の場合は女性はパートになるか、専業主婦になるかというところで半分以上を占めてしまっています。成績が上位という方の場合は、メリトクラシー原理が働いていると言えますが、やや上ぐらいだと専業主婦或いは結婚してパー

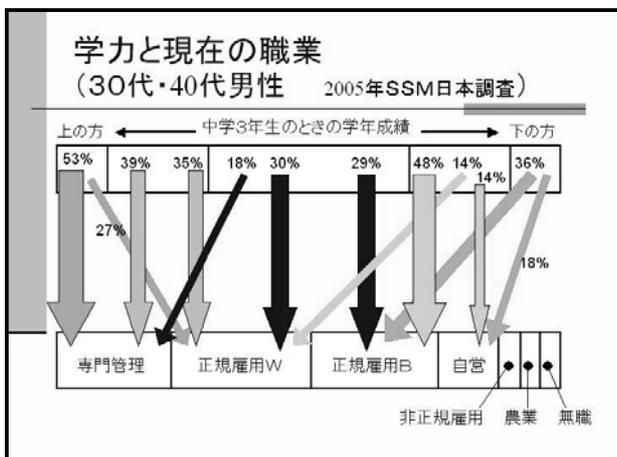


図3

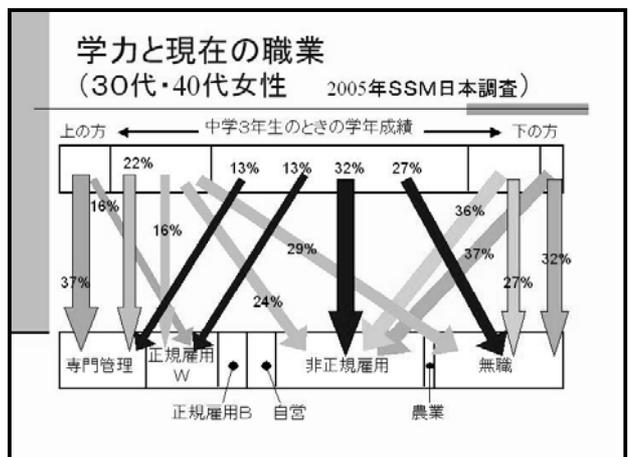


図4

トとなっています。この図4から、実はメリトクラティックな原理は、男性と比べた場合、女性に対して利いていないことが分かります。つまり、適用される社会のルールとシステムが性別によって異なっているというのが日本社会の現実なのです。メリトクラティックな学歴社会だからとか言いますが、女性にとっては余り関係ないわけです（笑）。

さて、メリトクラティックなシステムの矛盾についてお話したいと思います。ここまで見てきたように社会的資源の配分結果は女性には効かない場合もあるという現実がありました。一応メリトクラティックな状態になっていました。そして、確認しておきたいことは、このメリトクラシー原理が社会で正当性を持つための前提となっていたこと、すなわち、家庭の階層は小中学校ではシャッフルされ、家庭の経済力と学力には関係がないという理念がありました。けれども現実とは違うというお話をします。

図5は授業料減免措置を受けている生徒が何パーセントいるかというグラフです。ある県の高校の受験の難易度ランクを付けてあります。Iが一番難しいランクを示しています。Tは定時制、夜間の高校です。授業料の減免は、家庭の経済状況が厳しい場合に許可されます。2003年、2004年、2005年と3年分並べました。一番難しいIランクに属する高校には減免者はほとんどいません。2番目、3

番目、4番目、5番目になるに従って、減免者がどんどん増えていきます。しかも、III、IV、Vの各ランクについては、年とともに減免者率が増加していることがお分かりになると思います。

受験の難易度別は学力の違いを意味します。したがって、この図5は学力が上から下に行くにつれて、家計が厳しい家庭が増えていることを示しているわけです。出身階層の影響は大きく、経済状況が厳しい家庭で育った場合には進路を切り開いていくために必要な十分な学力が獲得できないことが多いのです。そして、学力が低いのは、本人の努力が足りないだけではなく、実は本人にはコントロールできない親の経済力で学力が決まってくる側面があるのです。にもかかわらず、勉強ができないことの原因を子ども本人の努力不足のみに限定してしまっているのが、今の日本の教育と社会の現実なのです。

では、教育システムの出口はどうなっているのか。図6で、赤が一番受験の難しい、学力の高い人たちの進路先です。それから1つ置きになっていますが、3番目がグリーンです。そして5番目がブルーです。紫は定時制です。進路先としては、大学、短期大学（今は女子でも4年制大学への進学が多いですが）、それから専修学校、アルバイトを含んだ就職、その他です。進路の分布は学校の難易度に

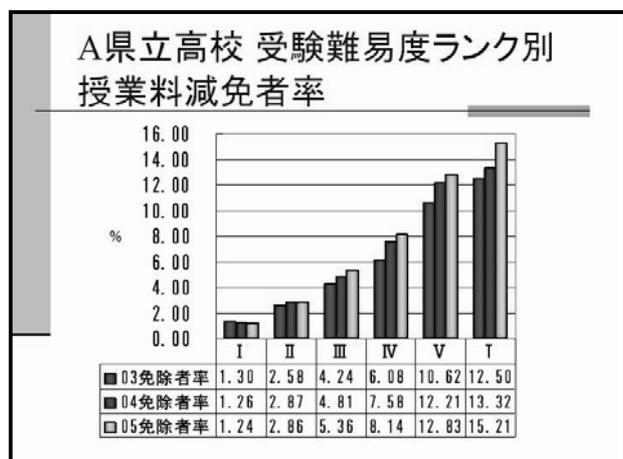


図5

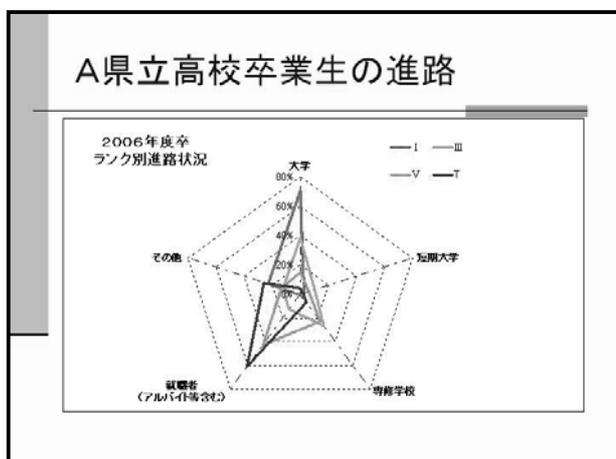


図6

よって全く違います。定時制或いは5番目のランクの場合には、進学せずに就職する人たちが多くなっています。アルバイトが含まれますから、フリーターはこちらです。その他ということは、無業。高校卒業後に何もしないでいるということが起こってしまうわけです。

このような進路の違いが、学力の違いによって決まってくる。そしてその学力の違いというのは、本人の努力だけではコントロールできない部分かなりあるわけです。つまり、もともとの能力は平等だということはそろそろまじめに疑わなければいけないということが見えてきてしまった、というのが日本社会の現実ではないでしょうか。

それでは、今日、格差を容認する社会になってしまっていると言われていますが、実際のところ、社会の人々は「機会は平等だ」と考えているのでしょうか。むしろ、現実には平等ではありませんけれども、それが我慢できるぐらいなのか、それとも我慢できないのか。機会はちゃんと平等にあると感じているのか。これは先ほどのSSM調査では、4つの質問を設定してたずねています。「高い地位や収入を得る機会は豊富にあるか」、「高い地位や収入を得る競争は納得のいく仕方であるか」「大学教育を受ける機会は貧富の差に関係ないか」「学校以外にも教育や訓練の機会は豊富にあるか」こういう

機会がたくさんあると感じているならば、そしてそれらの機会を利用しているならば、メリトクラシー原理によって「負け組」になったとしても、それは納得できるといえるでしょう。回答は4段階で、「そう思う」に4点、「どちらかといえばそう思う」3点、「どちらかといえばそう思わない」2点、「そう思わない」を1点をあて、合計点を出しました。ですから4つのものを全部「そう思う」と答えた人は合計点16点になり、4つ全部に「そう思わない」と回答した場合は合計点は4点になります。

図7には、約2000人分の回答結果を示しました。まず右側のグラフですが、男性は平均点が9.45ぐらいあります。女性の方は9.1ぐらいです。女性の方が、機会が不平等だと思っています。これは先ほどの職業の分布でも見ていただきましたように、やはり日本の場合には女性の方が機会が制限されていると感じることが多いのです。左側は職業別に整理した結果です。左側から管理職に就いている専門職の人、そして正規雇用のホワイトカラー、そしてブルーカラー、自営業、非正規雇用、パートやアルバイト、働いていない人となります。まず自営というのは、自分の力で、腕一本で仕事をしてきてそれなりにやっている人で、機会は平等だと思いやすいというのは昔から言われていました。みんなにチャンスはあり、自分はそのチャンスをうまくつかんだという自信があるタイプです。自信を持っている自営業よりもさらに「機会は平等である」と回答したのは、専門管理職、いわゆる大卒で専門職 — 例えば医師、弁護士、エンジニア — です。

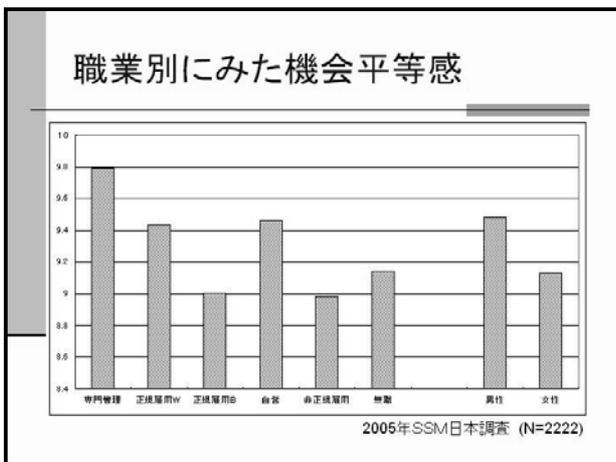


図7



最後に、皆さんと一緒に考えたい問題を幾つか挙げたいと思います。

まず、メリトクラシーの前提である、もともとの能力は平等であるということを疑わなければいけなくなっているということを指摘しておきたいと思います。日本の教育の問題を解決するためにはこの点を認めるところから出発する必要があるのではないのでしょうか。

次に、最後のグラフでお見せしましたけれども、専門職とか管理職とか自営であるとか、こういう機会をつかんだ「勝ち組」の人は、自分の機会を有難いものだという感謝はしておらず、みんなも機会を持っているのにつかみ損ねて「負け組」になっただけではないかと思っているわけです。例えば「ノブレス・オブリージュ」までとは言いませんけれども、今、自分が成功している人は、自分が機会に恵まれたということに対する感謝が必要だと思うのですが、どうやら日本の場合はそういう感謝を持たないで生きているらしい（笑）。自分だけを正当化してしまうのです。自分は努力したのだから自分の成功は当然のもの、成功していない人は努力していなかったから当然というように思っています。

このような状況では、「教育弱者」であり、現在では「社会的弱者」になっている人々の発言力は非常に弱いです。「機会は平等ではないです」という声が届いてきません。例えば教育政策をつくる官僚は、みんなこの機会に恵まれた人たちです。したがって、弱者たちの声は、彼らには聞こえない—聞く機会を彼らが持っていない—わけです。そして、エリートを養成するために、できる子をよりできるように、つまり学力の一番高い部分に資源をよりつぎ込むことを効率的だと主張しているのです。その上さらに、勉強ができない人たちに一生懸命に教育しても、どうせ浪費になるのだからもういいではないかと言う人までいる。このような主張を放置したままでいいのでしょうか。

実は、あっという間にお辞めになった安倍内閣では、「再チャレンジ」という「教育弱者」で「社会的弱者」になってしまった人たちに再チャレンジしていただきましょうという政策がありました。ところが、「社会的弱者」は、学校を出て社会に出てしまうと、拡散してしまうのです。どこにいるか実はよく分からない。そういう人たちに支援策をするにしても、届きにくいわけです。政策として実行していくには非常に効率が悪いわけです。だからこそ、子どもたちが社会に出てしまう前に、「教育の弱者」であるときに集中的に支援してしまった方が効率

的なのです。「社会的弱者」を支援するというよりも、その人たちが社会に出る前、教育の場にいる間に支援してしまった方が恐らくより有効であって、そして、その人たちにとっても時間のロスが少ないのです。

すでに95%ぐらいの日本人が高校に在籍するわけですから、学力が低いということが明らかに見えてしまうこの段階できちんと支援して、社会的資源の配分を適切に受けられるようにせねばなりません。無職のままではほとんど配分を受けることができず、或いは施しにしかならないもの、権利としてのセーフティーネットしか受けることができないということになってしまいます。こうした事態は避けなければなりません。自分の力でちゃんと資源を獲得していく達成感というのが、生きていく上では必要です。まずは、15歳ぐらいのときに、学力が低いと思われた人たちに、働いて得ていく達成感を与え、道を開いてあげる。これが重要ではないかと考えています。

ありがとうございました（拍手）。

(林) 佐藤先生、どうもありがとうございました。

大変興味深いお話で、私などの専門外の門外漢でも非常に興味深くうかがいました。要約するならば、近代的な平等という理念の結果としての近代教育制度と、不平等という現実との間の緊張関係。そして能力主義、或いはメリトクラシーと倫理との間の緊張関係。さらには社会的資源の平等な配分と政府の役割などの緊張関係についてお話くださったとまとめられると思います。

発表 2

中国の義務教育格差： 出稼ぎ家庭の子どもたちを中心に

山口 真美

J E T R O アジ ア 経 済 研 究 所 研 究 員

今日のフォーラムは、教育における負け組をどう考えるかということですが、その中では私のテーマは多少特異であるのかもしれませんが、つまり、出稼ぎ家庭の子どもたちの教育問題というのは、非常に限定された問題であるかに思えるかもしれませんが、実はその背景にいろいろな教育格差の問題が見て取れるのではないかという話題提起をさせていただきます。

今日は、まず中国の教育制度の概要をご紹介します。それから、中国で1980年代に出稼ぎという新しい社会問題が発生し、それに付随してその子どもたちの教育問題という新しい問題が起きた様子をご紹介します。次に、民間の対処法として「民工子弟学校」が出現してきた様子をご紹介します。民工というのは出稼ぎ労働者、子弟というのは子どものことで、出稼ぎ労働者の子どもの学校です。それに対して後追的に政府が対応をしています。新しい法律が作られたのですが、その過程をご紹介します。最後に、その背景にある中国義務教育格差を簡単にご紹介してまとめさせていただきます。

中国の学制は日本とほとんど同じ

です。小学校6年間、中学校3年間、高校3年間、大学4年間が基本になっています。中国の義務教育は、1986年にできた義務教育法によって規定されているのですが、小中学校、つまり6歳からの9年間です。そして、学費は無料ということが定められているのですが、実際にはそれでは各学校が運営していけなくなり、雑費と呼ばれる費用を各学校が生徒から徴収することになっています。これは実際には形を変えた学費といえるものです。

義務教育の実施は日本では国の責任ですが、中国はこの1986年の義務教育法の段階では、最も下のレベルの地方政府が実施するというようになっていました。義務教育は中国でも学区制です。学区というのは戸籍のある場所を対象にしています。教育経費が各学区の各学校にどのように配分されるかということ、その学区に何人戸籍を持つ児童がいるかということを基準に配分されています。そこで生じた問題が、親の出稼ぎなどのために一家で故郷を離

れてしまうと、学齢の子供でも義務教育を受けられなくなってしまうということなのです。

まず、中国の義務教育の概況を見たいと思います。就学率を見ますと、既に非常に高いというこ



とが分かるかと思えます。1986年に義務教育が実施されましたが、その時点で96.4%と、既にかなり高い就学率を達成していました。2005年時点でも99.2%です。(図1)

図2は、小学校、中学・高校・大学の就学率を見てみたものです。中学校の就学率も2005年時点で95%ですので、かなり高いということが出来ます。高校・大学の就学率と比べると、義務教育に当たる小学校・中学校はかなり高い就学率を達成しています。

ところが、そうした高い就学率を実現している小中学校段階なのですが、出稼ぎという新しい動きが起きてきたために、義務教育制度から外れてしまう子どもたちが発生したというのが次のお話です。

図3で、2004年の出稼ぎ労働者は1億2000万人とありますが、それだけの安くて豊富な労働力が中国経済の強みでもあるわけです。中国は、昔から出稼ぎというものがあったわけではありません。1949年の建国の時点では出稼ぎ労働者の数は約200万人だったといわれています。その後、1958年に戸籍制度が導入されました。この時点で、都市の工業化を優先的に進めるために、農村には都市に十分な食料を提供するという役目が求められたのです。農村の人々は農村にとどまって着実に食料を生産することを求められました。つまり、人口の移動が規制されたのです。

そのため、1958年から改革開放まではほとんど出稼ぎはできない状況でした。1978年から改革開放政策が始まり、人の移動もだんだんできるようになってきました。というのは、都市の側で労働力需要が大きくなったからです。同時に農村の側でも、それまで実施していた集団労働がなくなり、各家庭の判断で人手が余れば家族の誰かを出稼ぎに行かせるという決定もできるようになってきたのです。

その後1980年代、90年代を通して、出稼ぎがどんどん拡大していきまして、2004年には1億2000万人といわれる数の人たちが出稼ぎをしてい

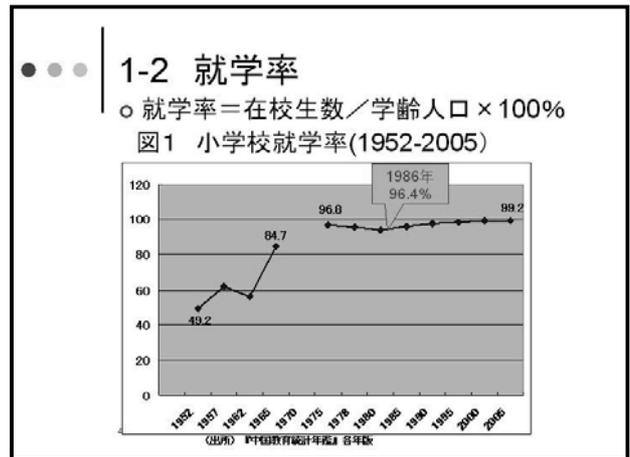


図1 小学校就学率

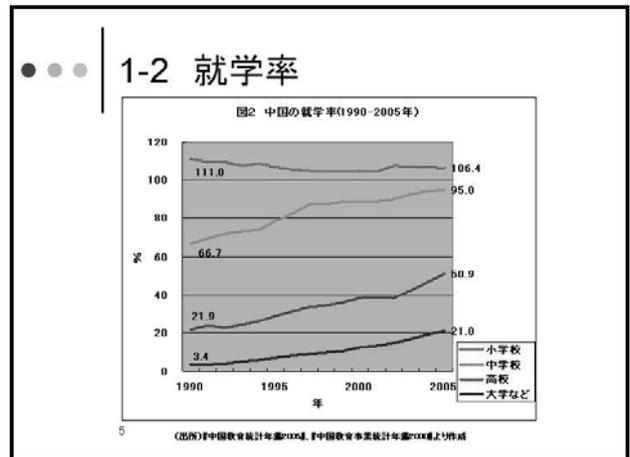


図2 就学率

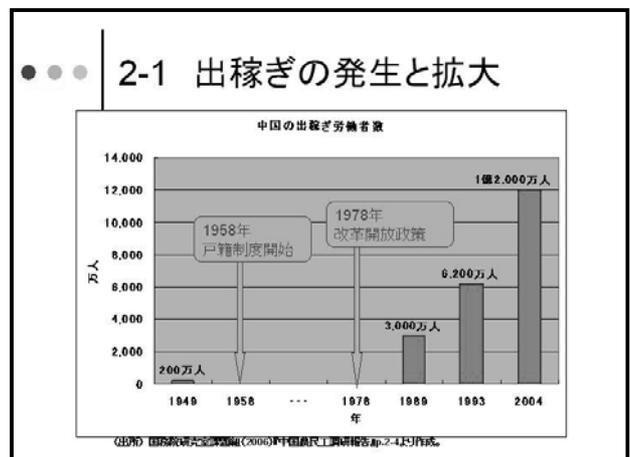


図3 出稼ぎの発生と拡大

ます。この過程では、単に数が拡大しただけではなく、出稼ぎの形も変化しました。最初は、例えば家庭のお父さんに当たる人が1人で出稼ぎに行きました。自宅を新築するためとか、子どもの教育費のために出稼ぎをしていたのですが、徐々に都市での出稼ぎが長期化してきました。それと共に、家族が長い間別れて住むというのは不自然な形ですから、それまで農村にいた家族を都市に呼び寄せて、都市と一緒に生活するということが始まりました。今では、出稼ぎ労働者の3割から4割が、農村から家族を呼び寄せて都市と一緒に生活しているといわれています。

そこで表れたのが、「流動児童」と「留守児童」といわれる子どもの問題です。

まず流動児童というのは、親の出稼ぎ先に一緒に行って都市などに滞在している、出身地を離れて住んでいる状態の学齢の子どもたちのことを指します。流動というのは戸籍概念です。戸籍のある場所を離れた人々のことを流動人口というのです。その子どもたちということで、流動児童という言い方を中国でされています。

一方、そのような子どもたちの他にも、留守児童と言われて、親が出稼ぎに行ってしまうと農村に残された子どもたちもいるのです。そういう子どもたちは誰と一緒に生活しているかという、両親のうちの片方だけが出稼ぎに行った場合は、もう1人

の親と一緒に住んでいるという場合もありますし、そうでない場合は、おじいちゃん、おばあちゃん、親戚や隣人など同居するという形を取っています。こうした流動児童、留守児童と呼ばれる子どもたちが、現在それぞれ2000万人ぐらい、合わせて4000万人いると言われています。

実は、この子どもたちの存在は、深刻な社会問題になっています。というのは、流動児童は出稼ぎに行った先でどうやって学校に就学すればいいのかという問題が生じるからです。それから留守児童の方では、親と長年離れ離れの生活を強いられるわけで、それはそれでまた別の社会問題になっています。

ここで、都市の側の一般的な公立校の様子を見てみたいと思います(図4、図5)。写真は上海市の公立校ですが、校舎は鉄筋コンクリートのしっかりとした校舎です。校庭は舗装された全天候型のグラウンドで、今の日本の学校とほとんど同じようなつくりだと思っています。教室には、1人1人独立した机とイスがあって、黒板の横には視聴覚教材としてのテレビがあります。教室の後ろの方には共用のパソコンが1台ありました。こういう感じの設備が都市の側の公立校です。

出稼ぎ労働者の子どもたちがこのような公立校に通うためにはどうしたらいいかという、政府が用意したのは「借読」という制度です。本来、義務



図4 上海の公立学校



図5 上海の公立学校

教育というのは自分の戸籍のある地域で受けるものなのですが、その戸籍のある地域を離れてほかの地域で教育を受けさせてもらうという制度です。義務教育の実施責任者は中国では地方の政府なので、都市に行って教育を受けるためには地元の政府の許可を受けて、出先の学校に「借読」の申請をするという形になっています。

そのときに費用の負担が生じます。先ほどご紹介しましたように、中国の学校では学費は取ってはいけないことになっているのですが、形を変えて雑費という費用が徴収されています。その費用が平均400元ぐらい、日本円にして6000円ぐらいです。この費用が都市の子どもにも、農村から都市に入った場合の子どもにもどちらにも請求されます。地元の子どものはこの雑費を払えば学校に通えるわけですが、農村から来た出稼ぎ家庭の子どもたちは、そのほかに「借読費」と呼ばれる特別な費用を払わなければならないのです。この費用は学校によって自由に決められるようなので、額はまちまちですが少ないところでも400元ぐらいです。実際はそれだけではありません。公立校には制服がありますし、課外活動、例えば博物館に見学に行くなどの場合に、それぞれ費用が掛かってきます。そういう費用を合わせると、1学期に1000元ほどです。1年間は2学期に分かれていますので、年間で2000元、日本円にして3万円ほどの負担を各出稼ぎ家庭がしなければならないということになります。

1998年当時は、この費用負担のほかに書類も非常に複雑だったといわれています。8種類の書類を集めなければならないと、高い費用負担と書類の複雑さのために、多くの出稼ぎ家庭の子どもにとって、「借読」は現実的にはほとんど利用できない制度だったのです。

そこで出来てきたのが「民工子弟学校」と呼ばれる特殊な学校です。図6は、倉庫か店舗かというふうに見えるかもしれませんが、貸し店舗を賃貸して運営されている学校なのです。図7は、古い民家を改造して造られた学校です。民家の窓のところに黒板を掛けているので暗くなってしまうのですが、そういう状態で運営されています。民家ですので、校庭はありませんし、教室の中の様子も非常に質素です。

上海市では、1996年に流動児童と呼ばれる義務教育段階の子どもたちが約20万人いると言われていました。最近のデータではこれが38万人と言われています。最初に上海で民工子弟学校ができたのが1992年ですが、それからすごい勢いで拡大しました。96年には100校から200校あったと言われており、最盛期の2001年には519校あったと言われます。在校生数も12万人いたと、メディアで報道されています。その後少し縮小し、357校になっています。徐々に公立校にも通えるように



図6 上海の「民工子弟学校」



図7 上海の「民工子弟学校」



図8 上海の民工子弟学校

なってきたということなのですが、それは後でもう一度お話ししたいと思います。

急速な経済発展の影に、実は民工子弟学校という無認可の学校があるわけですが、割と立派な学校も出来ています。図8は安徽省の出身の教員がつくった上海の民工子弟学校で、上海の地元企業の投資を受けて校舎を新設したものです。かなり学校らしいきちんとした設備を持っています。こういう学校も一部ではありますが、あります。



図9 北京の打工子弟学校

図9は、北京にある出稼ぎ労働者の子どもたちのための学校です。中心に写っているのは校長先生夫妻ですが、この校長先生は教員の出身ではなくて、元は建築関係の仕事をしていた出稼ぎ労働者でした。ただ、農村の人としては高学歴の高校出身です。出稼ぎ中に自分の周りにたくさんいる出稼ぎ家庭の子供たちが学校に通えないという問題に気づき、いわばビジネスとして学校を始めたわけです。

図10も、北京にある出稼ぎの子どもたちを集めている学校なのですが、学校の名前がないのです。ぼろぼろの民家を利用して造られているすごく小さな学校です。子供たちを集めて授業だけをやっているという状況です。一部には、こういう学校もあります。



図10 北京の打工子弟学校

民工子弟学校には幾つかのタイプがあるのですが、大きく2つに分けられます。

1つは、農村の地方教育委員会から民間の学校としての許可を受けた学校です。実は、上海にはこういう学校が多いのです。先ほど見た民家を改造して作った学校、それから企業の投資を受けて校舎を新設した学校などは、こういう形の学校です。それぞれ安徽省の教育委員会から民間の学校(中国語で「社会力量」といいます)として許可を受けています。民間の学校ですが、卒業生に卒業証書を出すことができる学校として運営されています。

もう1つのタイプが個人経営の無認可の学校で

す。先ほどの上海の店舗のようなところで運営されている学校は、このタイプの無認可の学校です。それから、北京にある出稼ぎ労働者の子どもたちのすべての学校は、実は無認可の学校なのです。無認可の学校では卒業証書が出ないということになります。

ここで、上海の民工子弟学校の生い立ちを簡単に見てみましょう。1992年に最初の民工子弟学校が創設されました。上海には、すぐ隣の安徽省出身の教員による学校が多く、小学校が中心です。中学校も一部できてきましたが、圧倒的多数が小学校です。学校の規模はまちまちで、小さい学校から500人規模の大きな学校まであります。学費は350～400元程度徴収されています。これはちょうど、故郷の公立校に通う場合の雑費と言われる費用に相当するぐらいの金額です。上海の民工子弟学校は、財政のサポートがありませんから、各学校が授業料を徴収して、それによって学校が運営されているわけです。出稼ぎ労働者の家庭にとっては、都市の民工子弟学校で学費を払っても、農村の公立校で雑費と呼ばれるお金を払っても、大体同じぐらいの金額ということになります。そうすると、子どもを故郷に置いて離れ離れに生活するよりは、上海に呼び寄せて一緒に住もうという形になってくるわけです。

例えば安徽省の教育委員会が許可した学校であっても、全国各地のいろいろなところから来た子どもたちを受け入れています。教育委員会のサポートがある学校では、卒業するとその学校の原籍地、つまりその学校を許可している地域の教育委員会が出す卒業証書をもらうことができます。

北京の民工子弟学校も、ほぼ上海と同じ1993年ごろから始まったと言われていています。ところが、北京の場合はすべて無認可の学校なのです。学校の創設者には上海のように教員出身という人が余りなくて、元出稼ぎ労働者であったり、農村で代用教員という、教員の資格はないけれども教員をし

ていたといったような人であったりします。学校を創設した人が農村の教育委員会と強いコネクションがないために、どうも農村部の教育委員会からのサポートを受けられていないようなのです。そのため北京の学校はすべて無認可の学校になってしまっています。

このように、民工子弟学校は各地ばらばらに発展してきていますが、それに対して行政は制度化の動きを見せています。流動児童と呼ばれる、戸籍地を離れてしまって教育を受けられない子どもたちのことは、政府にとっても大きな問題なのです。というのも、政府は義務教育を普及することを大きな目標にしていますが、戸籍のある場所を離れてしまった子どもたちに対してどういう教育を提供するかということは、先ほどご紹介しました1986年の義務教育法の段階では想定されていなかった問題だったのです。1998年に初めてこういう子どもたちへの対処法が示されました。外地の戸籍を持つ子どもたちは、今、親の出稼ぎ先などで住んでいる地域の公立小中学校で「借読」することを主な就学手段とするということが初めて言及されたのです。この「借読」の申請が難しかったのですが、その手続きが簡素化されて、臨時居住証という証明書さえあれば、借読制度を利用できるということになりました。1998年の規定では、それと同時に民工子弟学校のような民間の学校も補助的な手段として利用するとされています。比較的現実的な対処の仕方だと言えます。

さらに、2003年からより本格的になった新しい動きがあります。これまで出稼ぎ労働者の子どもたちの教育は、どこの政府が責任を持つかということが明確ではなかったのですが、この2003年の「都市に就業する農民子女の義務教育工作を徹底するための意見」という行政文書の中で、児童が今住んでいる地域の政府が責任を持つということが明記されました。それまでは、その子どもの戸籍がある地域の政府が義務教育を実施しなければいけな

いということになっていたのですが、今度は居住地の政府が実施するという、現実的に可能な方向に修正されてきました。それから、地元の児童と同等の扱いをするということで、借読費のような特別な費用を取ってはいけないということになりました。

さらに、居住地の政府の財政部門が、こうした子どもたちが多く通う学校に財政的なサポートをするということも言及されています。全体的に初めて居住地政府の責任に言及した意見、法令だということができます。

2006年に義務教育法が改正されているのですが(図11)、2003年の意見は引き継がれています。1986年の義務教育法の中では、出稼ぎ家庭の子どもへの扱いが全く想定されていなかったのですが、今度2006年には初めて居住地政府、つまり出稼ぎ先の今実際に住んでいる地域の政府が実施する責任を持つということを行っています。ただし問題なのは、具体的な規則は各省の政府が決めるということになっていることです。そのために、出稼ぎ先によっては対応がまちまちということがあります。

こうした出稼ぎ労働者の子どもたちの義務教育の状況は、現在では少し改善されてきています。公立校に通う子どもの割合は北京市では62%、上海市では50%、武漢市はかなり高く80%以上という調査報告が1つ出てきています。

ただし、学校の現場ではこういった子どもの受け入れに未解決の問題も多いです。その1つは、こういう児童をたくさん受け入れた各学校に対して、財政的なサポートがきちんと行われているかどうかという問題です。また、経済的な格差が非常に大きいので、貧しい家庭の子どもたちが都市の学校に入ってきてしまうと、先生としては対処が難しいのです。例えば、先生たちは生徒の成績によって評価されています。そういった場合に、出来の悪い子どもが入ってきてしまうことは、教員にとって大きな負担になるということも報道されています。

さらに、よく報道されていますように、中国の

都市では非常に厳しい受験競争が展開されていますが、それと共にゆとり教育も導入されています。農村の子どもたちの場合、実は競争がもっと厳しくて、かなり受験に対応する勉強をしないと進学が難しいという状況があります。農村出身で都市の学校に通う子供は、都市の子どもと一緒にゆとり教育を受けていると、将来農村に帰って進学する時に競争に勝ち残れないという現実もあります。

義務教育の経費の格差について簡単にご紹介します。図13は、全国の小中学生の1人当たりの教育経費です。左側の棒グラフは全国の数字、右側は農村部です。本当は都市と農村を比較するとかなり大きいということが分かるのですが、都市だけのデータがありませんので、全国と農村を比べると、やはり格差があることが示されています。

図14で分かるように、もっと深刻なのは、地域間の格差です。上海市は全国でも小中学生の1人当たりの教育経費が最も多いところですが、一番少ないところが河南省という、それほど上海から離れていない内陸の農村部です。その2つを比べると、同じ小学校でも上海市の小学校の生徒1人当たりの教育経費が9767元(約15万円)に対して、河南省の農村部の小学生が881元(12000円)です。1人当たりの教育経費が10倍以上違うということが分かります。

こういった経費の違いを背景として、農村の義務教育の難しさがあります。農村では小学校の就学率はかなり高くなっているのですが、中学に入ってから中退する子どもがかなり多いと言われています。8~10%ほどの子どもたちが中退してしまいます。その背景に家庭の経済的な負担があります。雑費という名前で学費が徴収されることが、農村の家庭にとっては大きな負担となっています。それから、教育のレベルの問題があります。農村部では、小学校までの教育の質が十分でない場合、授業内容が中学に行くと急に難しくなり、ついて行けなくなる

● ● ● 行政による制度化の動き

○ 2006年「義務教育法」の改正

	1986年義務教育法 1992実施細則	2006年新・義務教育法
学費・雑費	学費無料 雑費の徴収	学費・雑費とも無料
義務教育の実施責任	地方政府	国
出稼家庭の子供の扱い	想定なし	児童の居住地政府に 実施責任 ※具体的な規則は各省 政府が決定する

24

図 1 1 2006年「義務教育法」の改正

● ● ● 5-1 義務教育の経費格差(2)

図 2005年小中学生一人あたり教育経費の省間格差

地域	小学生	中学生
上海市	9,787	12,255
河南省	973	1,256
上海市 農村	8,223	10,217
河南省 農村	861	1,066

27 (出所) 『中国教育統計年鑑』各年版

図 1 4 義務教育の経費格差 (2)

● ● ● 4-2 「流動児童」義務教育の現状

○ 「流動児童」に占める公立小中校での就学者比率(『2008中国社会形勢分析与予測』)

- 北京市 2005年末: 62.0%
- 上海市 2006年: 50.7%
- 武漢市 2006年: 81.5%

○ 学校現場では、「流動児童」受け入れに未解決の問題も多い

25

図 1 2 「流動児童」義務教育の現状

● ● ● 5-3 高校進学率の都市農村格差

表 中卒者の高校進学率の変遷(1987-2005年)

年	高校進学率(%)		
	都市部	農村部	合計
1987	40.1	19.5	22.8
1990	40.2	18.9	22.5
2002	74.2	28.3	36.0
2003	77.4	29.3	37.7
2004	80.7	31.0	39.7
2005	87.0	32.7	41.7

(注) 農村部には「鎮」と呼ばれる中心町も含む。
(出所) 『中国教育統計年鑑』各年版より算出。

- 高い徴収金(教科書代、寄宿費、食費、光熱費、学級費、制服代、健康診断代、答案用紙代...)
- 600~2400元/年
- 農村の高校不足
- 小中学校の教育の資格差
- さらに高い大学の学費

29

図 1 5 高校進学率の都市農村格差

● ● ● 5-1 義務教育の経費格差(1)

図 小中学生一人あたり教育経費

年	小学生	中学生
1989	695	537
2005	1,823	1,573
2005 (農村)	1,820	2,211

26 (出所) 『中国教育統計年鑑』各年版

図 1 3 義務教育の経費格差 (1)

という問題があると聞いています。中学になると農村部では学校の数が減りますので、遠距離通学や、中学校のときから寄宿生活をしなければならないというような負担もあります。さらに、農村部では就職先が少ないため、中学から高校、高校から大学に進学するという将来展望がなかなか開けないということがあります。

その結果、高校進学率も都市と農村ではかなり大きな違いができます。図15の2005年のところを見ていただきますと、都市部では87%の中学校卒業生が高校に進学しているのですが、農村では32.7%です。3分の1ぐらいの子どもしか高校に進学していないということが分かります。この背景には、高校の学費が高いということもあります。それから学校が足りない、学校の数が少ないので遠距離通学になってしまう。それから、小中学校の学校教育が不十分で、高校への進学試験が難しいという問題もあります。さらには、大学に進学すると、さらに高い学費、1年間約1万元（約15万円）掛かりますが、農村の家庭にはそういったものを負担仕切れないといったことも大きく響いています。

最後に、今日のお話を簡単にまとめます。出稼ぎという中国社会においては新しく発生した状況に対して、義務教育が追いつかないというのが最初の状況でした。義務教育機会に不平等が生じてしまった問題への最初の対処は、草の根のものでした。出稼ぎをしている親たちの求めを受けて、農村出身の教員たちが都市に出て行って学校を作ったのです。それに対して、行政が後追いの的に制度をつくって、また、そういう学校も利用しながら公立校に行けるように支援してきたという流れでした。現在では、このような義務教育機会の格差というのは、制度上解消されつつあります。ただし、実際のやり方は、地方の各都市の政府に任されている部分もありますので、実際にどの程度格差が解消していくのかということは、これからもっと現場の取り組みが必要です。さらに、もう1つの質の問題というのは依然

深刻であると思います。

現場レポートのような感じでしたが、以上で私の報告とさせていただきます。ありがとうございました（拍手）。

(林) 山口真美さん、どうもありがとうございました。中国から来た私なのですが、気持ちを暗くしながら聞いておりました。実はこれは中国の知識人中でも近年大きく話題にしている問題です。近代とは均質化というようなことなのですが、均質化というのはやはり国家对個人の、アトム化されているような構造なのです。実際経済的に見れば、新たな格差をつくった構造でもあると私は思うのです。ただ、中国では改革開放そのものが格差をつくった張本人だという解釈が近年なされてはいるのですが、今日の山口さんの現場報告の中でもおっしゃった通りに、1958年に始まった都会と農村の戸籍の二分化こそ張本人ではないかと思います。言い換えれば、毛沢東もその責任が大きいのではないかと私は思います。

発表 3

高校教育の日星比較

— 選抜度の低い学校に着目して —

シム・チュン・キャット

東京大学大学院教育学研究科博士課程

私は自分の国の調査だけでは物足りないので、日本も調査しました。比較してみると非常に面白い結果がいろいろ分かったので、今日はそれをお話したいと思います。なぜ日本とシンガポールを比較したのかと言いますと、まず両国とも「東アジアの奇跡」と一時言われた国々です。すごく短時間で成長してしまった国です。でも、いろいろな社会問題が起きている国でもあります。また両国とも天然資源に乏しい国です。シンガポールの方がもっと乏しいと思います。だから人が頑張って、資源を、富を構築するしかないという宿命を負っています。教育においては、先ほど佐藤先生がおっしゃっていたメリトクラシー（業績主義）が土台となっています。そして、学校生徒の学力が高い。もちろん最近日本は落ちていると言われてはいますが、まだまだ高いです。

図1は国際数学・理科教育動向調査の数学の成績の過去10何年間の順位です。日本は落ちていまずけれども、まだベスト5に入っています。日本はこういう順位に対して一喜一憂する必要もないと思います。なぜかという、例えば日本が落ちなくても、ほかの国が上がった場合には順位がどんどん下がっていきまます。これは相対順位

です。余り問題にしなくていいと思います。参考にするだけでいいです。気になるのは、順位が高いのは全部漢字系の国だということです。勉強し過ぎだと私は思います。別にシンガポール人が一番頭がいいとは思いません。たくさん勉強しているからです。かわいそうに。とにかく、日本もシンガポールも基礎学力が高い国として見なすことができます。

私たちの研究は、日本とシンガポールそれぞれの高校3年生1300人を対象に調査しました。

■シンガポール

下位校 ITE 生徒	573 人
上位校生徒	371 人

■日本

専門学科下位校生徒	221 人
普通科下位校生徒	183 人
普通科上位校生徒	228 人



図2は、一日の家庭での勉強時間です。日本の場合は、北陸地方のあるとても教育熱心な県で調査しました。この表は朝日新聞にも何年前に紹介されたほど、すごくショックなデータだったわけです。なぜかという、

国際数学・理科動向調査(TIMSS)

■ 数学の成績(中学校2年)

順位	1995	1999	2003
1	シンガポール	シンガポール	シンガポール
2	韓国	韓国	韓国
3	日本	台湾	香港
4	香港	香港	台湾
5	ベルギー	日本	日本

図1 国際数学・理科動向調査 (TIMSS)

この1300人をそれぞれの順位にランクで分けて分析すると、左側が一番いい学校、右はもっと頑張してほしい学校です。シンガポールは濃い色の方です。シンガポールの場合では、学校のランクに関係なく生徒はほとんどそれなりに勉強しています。しかし、日本の場合は、いい学校の生徒は何と一日3時間以上勉強しているのに、ランクの低い学校に通う生徒はほとんど勉強していません。この格差は非常に驚きものです。つまり日本の問題は、学力低下よりも学力格差ということが分かります。ここには塾の時間は入っていません。この地方には余り塾がないので、家での勉強時間が学校外での努力と見なしていいと思います。

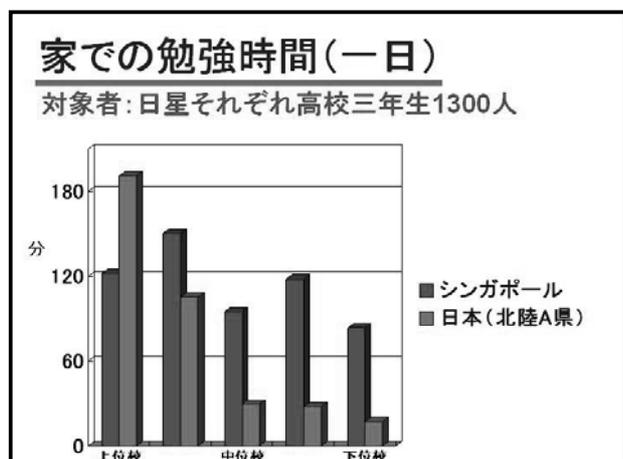


図2 家での勉強時間 (一日)

先ほど佐藤先生もおっしゃったように、問題は下位校にあります。選抜度の低い下位校での教育はどうなっているかということについて分析する時に、3つの指標を決めました。まず、Inputは、どのような生徒がどのような動機を持ってその下位校に入学するのかということ。Throughputは、学校の授業や先生について生徒はどのように考えているのかということ。これは先生がどのように考えているかということよりも重要です。先生が自分をすごく良いと思っていても、その生徒がそう思わなければ無駄です。そして、3番目のOutputは、その学校の授業と先生のやり方によって、生徒の進路志望および学習意欲がどのようにになっているのかということです。

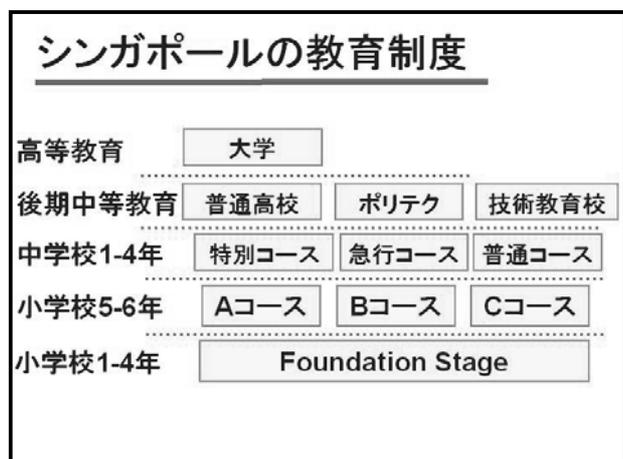


図3 シンガポールの教育制度

その前にシンガポールの教育制度を簡単にご紹介します。小学校1～4年まではみんな共通のカリキュラムで勉強します。その後、5～6年生はAコース、Bコース、Cコースに分かれます。一番頭のいい子はAコース、中間はBコース、もっと頑張してほしい子はCコースです。大体敗者復活は不可能です。中学校になると、特別コース、急行コース、普通コースに分かれます。それぞれレベルが違います。高校になると、普通高校が進学校です。ポリテクはほとんど職業教育です。技術教育ももち

ろん職業教育です。そして、大学。点線は全国共通試験です。大学まで来れた人たちは、もう百戦錬磨といえるほど、いろいろな難しい試験をくぐり抜けた人たちです。

シンガポールには私立の学校がないので、ほとんど国民はこの制度に従います。インターナショナルスクールへの入学も原則的に許されません。だから好きであろうと嫌いであろうと、みんなこの制度をくぐり抜けます。一番オーソドックスな道はいいコースに入って大学を目指すことです。次はポリテクを通して、線がちょっと細いですが、敗者復活もできます。一番遠い道のりは、今回の調査対象の技術教育校を通して、頑張ってポリテクへ行って、またまた頑張って大学へ行くというものです。それぞれパーセンテージもある程度決められています。大学まで行けるのは、人口の2割しかないのです。ほぼ日本の半分以下です。

シンガポールの下位校は技術教育校 (Institute of Technical Education) なので、その略は ITE ですから、愛称で It's The End と呼ばれています。とても悪い言い方ですが、そこに行ったら終わりだというイメージが強いのです。

それでは、まず Input、どういう学生が入ってくるのかという分析ですが、中学の成績、お父さんの職業、お父さんの学歴、入学動機について分析しました。

図4は中学校の成績ですが、言うまでもなく、日本もシンガポールも下位校の生徒の中で中学校の成績が上位の人は非常に少ないです。どちらも1%です。ほとんど中位か下位で、下位が一番多いです。だから下位校に入っています。上位校は逆転します。日本の方が83%、シンガポールよりも明確に分かれています。だから下位校には成績の悪い人が多い。だから下位校と言われるのですけれども。

図5は、お父さんの職業です。ホワイトカラーは日本の場合、上位校では半分以上、下位校では25%。シンガポールは同じように上位校59%、下

成績	日本		シンガポール	
	下位校	上位校	下位校	上位校
上位	1%	83%	1%	49%
中位	32%	13%	51%	49%
下位	58%	1%	43%	0
無回答	9%	3%	5%	2%

図4 中学校成績

	日本		シンガポール	
	下位校	上位校	下位校	上位校
ホワイト	25%	52%	28%	59%
その他	55%	33%	70%	40%
無回答	20%	15%	2%	1%

図5 父職

	日本		シンガポール	
	下位校	上位校	下位校	上位校
大卒以上	14%	49%	4%	29%
その他	71%	37%	95%	69%
無回答	15%	14%	1%	2%

図6 父学歴

位校 28%というふうになっています。これは恐らく現実であり、どこの国を調べてもこういうデータが出てくると私は思います。やはり下位校には経済環境が芳しくない人が多いということです。

図6のお父さんの学歴も同じようになっています。日本の場合、お父さんが大卒以上なのは、上位校では半分ぐらいで、下位校では14%です。シンガポールの場合では、大卒は非常に珍しいわけですが、それでも上位校が29%、下位校では4%ですから、やはり下位校の生徒の親は学歴が低いことが分かります。

日本もシンガポールも、上・下位校間の学力差は一目瞭然です。そして下位校生徒の出身階層が低い。このことについて、有名なLee Kuan Yew 元首相は、「It's a fact of life, and you can't change it」と言っていました。「誰にも変えることができない。人生の現実だ。」金持ちには資源があります。もちろん良い学校に行かせられます。良い塾、良い家庭教師を雇うこともできます。それを責めてもしょうがない。だからもっと下位校の生徒に対して手厚くしましょうというのがシンガポールのやり方です。

図7は、下位校のみの入学動機です。仕方なく「成績に合っていた」が高いです。しょうがないから下位校に入るしかない。ところが、「進学に有利」と思って入学した生徒は、日本では、普通科下位校でも専門学科下位校でも低いのにに対し、シンガポールでは9割います。頑張ればまだ道が残っていると思っているということです。「産業が求める知識を教えてくれる」、日本がそれぞれ2割と6割なのに対して、シンガポールは9割。「授業内容が自分の興味関心に合っている」については、日本が4割と4割なのに対して、シンガポールは8割です。日本の場合は、興味関心もなければ、産業が求める知識も教えてくれないという生徒の答えが多かったのです。つまり、両国において入学するときの期待と心構えが違います。シンガポールの場合は生徒から見ると、進学も就職も有利になるから Double-

Chance。日本はNo-Chance。進学が有利になることもなければ、産業が求める知識を教えてくれることもないという生徒の答えからすると、まさにNo-Chanceです。

次に、Throughput、学校の授業と先生について生徒はどう考えているかを見てみましょう。全部下位校のデータです。図8をみると「授業は面白い」と答えたのは、日本の場合、普通科下位校が4割、専門学科下位校が3割なのに対して、シンガポールは8割近くです。「自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業が多い」については、日本は低く、シンガポールは9割。ここにも歴然たる差があります。

これに上位校を入れるとどうなるかということ、「授業が面白い」は日本の場合も5割、シンガポールも5割です。いい学校は恐らく受験勉強がメインなので、面白くないと思っているのでしょう。「自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業が多い」については、何と日本の上位校でも低いです。日本の場合はどの学校に行っても、自分で考えたり、しゃべったり、問題を解決する授業が少ないということです。でもシンガポールの場合は9割になっています。ここにも大きな差があります。

図9は、先生についてです。先生は「勉強が重要だと強調」するのは、シンガポールの下位学校が8割以上なのに対して、日本の場合は普通科下位校で5割、専門学科下位校で5割。先生は「私がいい成績を取ることを期待」しているかという質問に対して、日本の場合生徒は全然期待されていると思っていません。でも、シンガポールの場合は、下位校でも先生は生徒に期待します。「先生は学問的に優れている」と生徒が考えるのは、日本の場合5割なのに対して、シンガポールは8割を超えています。「勉強以外の面でも私のことを気に掛けてくれる」のは、日本の場合は5割、シンガポールの場合は7割です。

これに上位校のデータを入れてみますと、先生は

入学動機			
	日本		シン
	普通下	専門下	下位
成績とあっていて	58%	80%	87%
進学に有利	42%	32%	90%
産業が求める知識を教えてくれる	20%	60%	90%
授業内容が自分の興味関心にあっている	44%	48%	83%

図7 入学動機

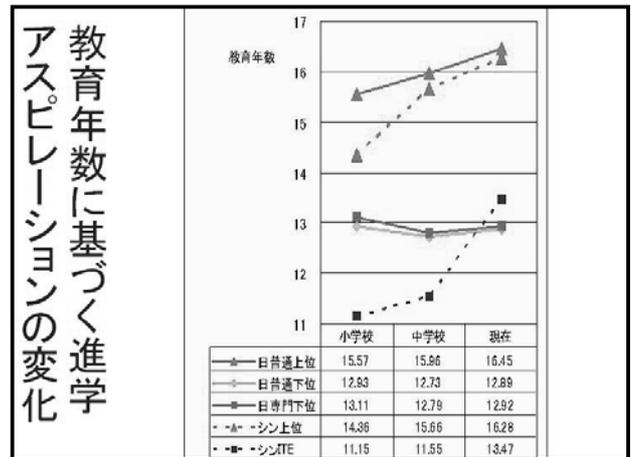


図10 教育年数に基づく進学アスピレーションの変化

	日本		シン
	普通下	専門下	下位
授業はおもしろい	40%	37%	79%
自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業が多い	27%	38%	92%
日本			
	上位	-	上位
授業はおもしろい	50%	-	49%
自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業が多い	36%	-	90%

図8 学校での学習

	日本		シンガポール
	普通下	専門下	ITE
する	35%	29%	83%
しない	65%	71%	17%

図11 家での勉強時間

学校での学習					
	日本			シン	
	上位	普下	専下	上位	下位
先生は... 勉強が重要だと強調	86%	57%	54%	95%	87%
私が良い成績をとることを期待	49%	26%	27%	84%	77%
学問的に優れている	85%	48%	49%	88%	86%
勉強以外の面でも私のことを気にかけてくれる	46%	55%	54%	66%	72%

図9 学校での学習

(従属変数: 家での勉強)	日本	シンガポール
性別		* *
父学歴		
母学歴		
父職	*	
母職		
経済的豊かさ		
現在成績		
中3時生成		
進学アスピレーション		* *
入学動機1: 成績にマッチ		* *
入学動機2: 進学に有利		
授業おもしろい		* *
先生気にかけてくれる		*
仕事に役立つ知識や技術		* *

図12 ロジスティック回帰分析

「勉強が重要だと強調」というのは、日本の上位校が8割で、シンガポールと同じレベルです。日本の下位校だけが低いわけです。先生に「私がいい成績を取ることを期待」されていると思っているのは、日本の場合は意外と低く5割ですが、それでも下位校よりは高い。シンガポールは下位校でも上位校でも高い。先生は「学問的に優れている」ことは、日本の上位校では評価していますし、シンガポールも全員評価しています。評価していないのは、日本の下位校だけです。先生を尊敬していないのです。先生が「勉強以外の面でも私のことを気に掛けてくれる」割合は、日本の場合、全部低いです。つまり勉強以外の面で、日本の高校の先生は余り生徒のことを気に掛けない。シンガポールの先生の方が気に掛けてくれる。特にシンガポールの下位校の生徒に対して、先生が勉強以外の面でも気に掛けていることがこれで分かります。

最後に Output ですが、アスピレーション、学習意欲について分析しました。図10は、教育年数に基づく進学アスピレーションの変化です。調査対象に対して、小学校、中学校、現在（高校）、それぞれの時点で、どこまで教育的に進みたいかについて聞きました。例えば教育年数でいいますと、高校まで行きたいなら12年。大学まで行きたいならプラス4だから16年。16を超えると、大学院まで行きたいということです。

点線がシンガポール、実線が日本、上の方が良い学校、下の方がもっと頑張ってもらいたい学校です。この図から分かるように、シンガポールも日本も良い学校の生徒は小学校の時点からもうアスピレーションが高いです。進学するにつれて徐々にもっと高くなっていきます。でも、日本の下位校の場合は横ばい状態でずっと低いままです。平均値は大学レベルまで行っていません。13年ですから、恐らく専門学校程度か高校卒業までということです。

シンガポールの場合も下位校のアスピレーションは非常に低いです。しかし、現在（高校）においていきなり跳ね上がることがこの図から分かり

ます。つまり、中学校を卒業して、今の高校に入った後、何かがあって、彼らのアスピレーションが加熱されたということがこの図から分かります。

まず家で勉強するか、しないかについて聞きました。日本の場合、「しない」が普通科下位校で6割、専門学科下位校で7割なのに対して、シンガポールは見事に逆転で、ほとんどしています。日本の場合は下位校では勉強する時間が非常に低いことが分かります。

では、どういう生徒が勉強をしていて、どういう生徒がしないのかについても分析してみました。これは統計学のロジスティック回帰分析です。専門的なことは省略しますが、家で勉強するかどうかについての要因分析です。*印が付いているのは、この要因だけが影響を及ぼすことを示しています。例えばシンガポールの場合、2つあります。実はシンガポールの場合、女性の方が頑張っているのです。いろいろな調査で分かったのは、女性の方が良い成績を取っているし、努力しています。なぜでしょう。

日本の場合はほとんどなくて、唯一の要因は父の職業がホワイトカラーの方が、家で勉強する時間が長くなる確率が高くなります。でもシンガポールではそのような階層的な要因は見られません。見られるのは特に下の3つで、授業が面白いと思うほど勉強する確率が高くなります。先生がほかのことで気に掛けてくれると、勉強する確率が高くなります。それから、仕事に役に立つ知識や技術を学校が教えてくれると思う生徒ほど、家で勉強する確率が高くなります。つまり、学校での取り組みや、先生の生徒への接し方が、家での学習行動に影響を及ぼすことがこの図から分かります。

日本の下位校について結論です。出身階層が低い上に、No-Chance。それでも学校に行くのは、9割以上の人が高校に行くから仕方なく行っているのでしょう。学校での学習活動は、何か活気がない。先生も元気がなければ生徒も元気がない。学習意欲も

低い。実際にそのような学校へ行って受ける印象も同じです。結論は、レフトアウトされる、つまり、のけもの、孤立無援の生徒たち。非常に不利な立場に立たされているにもかかわらず、政府も学校も何もしないというのが日本の現状です。寂しいですね。

シンガポールの下位校についてまとめてみると、出身階層は低いですが、狭い道ながらも Double-Chance。元気な学校像が見えてきます。そして、アスピレーションも学習意欲も高いという結果が出ています。では、なぜシンガポールはこうなっているかを説明しましょう。

まず、常に授業のカリキュラムと指導方法を見直しています。企業が求めない知識は教えません。古くなったものはすぐに捨てます。教師は勉強の重要性を強く説き、卒業生のサクセスストーリーをまとめた冊子を生徒に配ったりします。例えば「I did it my way」というパンフレットには、私は私のやり方で成功しましたという、卒業生のサクセスストーリーがたくさん書かれています。年に4冊出されていて、全員に配ります。君も頑張ればこうなれますということを強く説いています。

教師は下位校のためだけに採用されます。下位校というのはニーズが特殊であるからです。下位校の教師は勉強だけではなく、ほかの面でも気に掛けなければならぬということが分かったからです。採用された時から退職するまでずっと下位校です。これは日本と違います。日本では採用されるときは、良い学校に行くかもしれないし、悪い学校に行くかもしれない。良い学校に行った場合も、5年後にはまた転勤になって、また違う学校に行くかもしれないという不安定さがあります。

シンガポールの場合は、生徒が卒業する前に試験があります。だから勉強しないと卒業できません。でも日本の場合は、だらだら学校に通っても、一応高校卒業証明書がもらえます。私から見ると、「あれ？」と思います。

シンガポールでは技術教育校 (ITE) から大学までの敗者復活ルートがはっきりしています。このパ

ンフレットが示すように、そのことについて生徒も全員分かっています。しかもそのルートというのは、例えば日本のように大学入試を再チャレンジするのではなくて、本当に技術教育校で習った技能、技術能力を基準とした別の競争ルートになるのです。例えば、ものづくりでうまければそのまま大学まで行けますということです。

結論です。Throughput、つまり、学校での取り組みと向上は、Output に寄与しています。下位校が教育的・社会的セーフティーネットとなるべきです。つまり卒業してしまった後では、もう遅いです。学校にいるうちに何とかしないと手遅れになってしまいます。先ほど佐藤先生もおっしゃったように日本の場合は大体手遅れになっています。下位校への投資と改革が急務となっています。なぜかという、下位校の在り方は、意欲の低い若者の問題にもつながるし、階層間の不平等の問題にもつながり、日本の将来の問題にもつながっていると私は強く信じるからです。

最後に、日本の方はとても驚くのですが、シンガポールには全員の生徒に、教育貯蓄基金のアカウントがあります (図 1 3)。

まず「奨学金」です。いろいろなコースが学年ごとにありますけれども、下のコースでも上のコースでも成績がトップの 10% だったらお金をあげます。

Edusave Scheme (教育貯蓄基金)		
Edusave Scholarship 奨学金	学年とコースごとに成績がトップ10%	中学生: \$500 (¥40000) 小学生: \$300 (¥24000)
Edusave Merit Bursary 好成绩・助学金	成績がトップ25% 且つ世帯月収 \$3000 未満	ITE生: \$400 (¥32000) 高校生: \$300 (¥24000) 中学生: \$250 (¥20000) 小学生: \$200 (¥16000)
Good Progress Award 進歩賞	成績が最も進歩した生徒のトップ10%	ITE生: \$300 (¥24000) 高校生: \$200 (¥16000) 中学生: \$150 (¥12000) 小学生: \$100 (¥ 8000)

図 1 3 教育貯蓄基金

中学生の場合は500ドル、小学生の場合は300ドルです。これはもちろん300ドルを「はい、あげますよ」というわけではありません。この貯蓄基金の方に貯蓄されます。この金は教育活動にのみ使うことができます。例えば授業料を払ったり、海外旅行をしたり、修学旅行をしたり、教科書を買ったりです。だからiPodなどは買えません。教育活動のみです。

次に、「好成绩・助学金」は、成績がトップの25%で、かつ世帯月収が3000ドル未満の場合に支給されます。先ほど言った下位校、ITE（技術教育校）は400ドル、高校生は300ドル、中学生250ドル、小学生200ドルです。だからみんな頑張ります。

最後に一番拍手を送りたいのは、進歩賞（Good Progress Award）です。つまり去年はビリだった、今年もビリ、しかし成績が良くなりました、よく頑張ったでしょうということでお金をあげます。よく頑張った人たちのトップ10%には、ITE生300ドル、高校生200ドルがこの基金に貯蓄されます。これはつまり、努力することは良いことだというメッセージを送りたいためです。もちろん非常にお金が掛かる事業です。

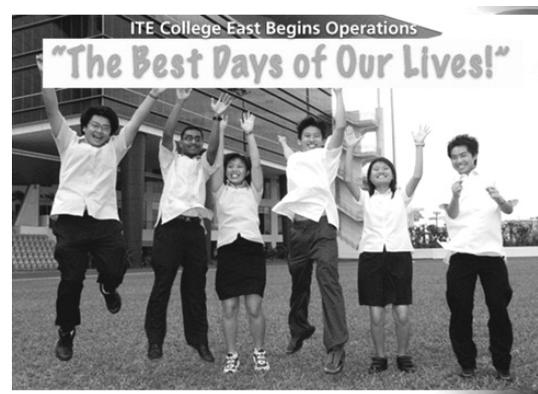
最後に紹介したいのは、シンガポールの下位校、技術教育校の校舎です。一緒に調査で行った日本の大学の先生がびっくりして、「まるでホテルのようだ」とおっしゃったことを今でも覚えています。



建築賞をもらったほどのキャンパスです。もちろ

ん非常にお金を掛けています。下位校だからといってぼろい校舎では許されません。下位校だからこそ、もっともっと頑張ってもらいたいという願いが込められています。もちろんシンガポール政府はお金を持っているからこういうことができますけれども、日本の場合は財政難といわれているから、どうしましょう。

素晴らしい校舎に引っ越して、喜んでいる下位校の生徒たちです。インド人もいればマレー人もいますし、チャイニーズ系もいます。“The Best days of our lives”と喜んでいます。励ましになっています。



下位校の生徒が、ラオスに行って校舎を建て電気を引いてあげています。ボランティア活動です。つまり、あなたたちが習っていることは、いろいろ社会貢献もできますよというメッセージを送りたいためです。



It's The End, ITE。急ぎ足でしたけれども、ご清聴ありがとうございました（拍手）。

パネルディスカッション

教育における『負け組』をどう考えるか

パネリスト： 佐藤 香 氏（東京大学社会科学研究所准教授）
山口 真美 氏（JETROアジア経済研究所研究員）
シム・チュン・キャット 氏（東京大学大学院教育学研究科博士課程）
進行： 孫 軍悦 氏（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

（孫） それでは第2部のパネルディスカッションに入りたいと思います。進行役を務めさせていただきます孫軍悦と申します。よろしくお願いいたします。

早速ですが、まず先生方に先ほどのような報告に対して補足したいところ、或いはほかの方の報告を聞きまして、質問したい、感想などがありましたら一言お願いします。

（山口） 今日は中国の出稼ぎ労働者の子どもたちの教育問題についてご紹介しました。中国はすごいスピードで経済発展していますが、国が大きいし人口も多いということで、非常に大きな問題を抱えています。日本とシンガポールという、お金持ちかつ小さい国の教育問題と同時に議論することは難しいと感じています。日本とシンガポールの話題は、高校段階でどう「教育の負け組」に対処するかということだったのですが、中国においては、まだ義務教育で負け組がいるということが1つのポイントでした。実は中国でも都市の側ではものすごい受験競争が繰り広げられています。そして、農村では、それとはまた違った問題が起きています。そしてそのはざまに出稼ぎ労働者の子どもの教育問題というのも起きているということで、今日お伝えできたことは問題のごく一部なのです。都市の受験競争と農村のまだまだ追いつかない教育の問題、そのはざまの問題ということなのです。

（佐藤） シムさんのご報告は日本とシンガポール

の比較でしたが、報告を伺いながら、私が日本の教育について申し上げた問題についての印象が一層深まり、日本人として情けない思いで聞いておりました。中国では、日本の人口が丸ごと出稼ぎに来ていて、その人たちの子どもの学校をどうするという問題があるわけです。今まで経済支援のような形で、国境を越えていろいろなことをやってきていますけれども、教育についても1つの国だけで収まるものだけではなくてきていて、教育支援という形での国際協力もあるのではないか、今後、そういうことをアジアの中で考えていく必要があるのかなと思って聞いていました。

（シム） もちろんシンガポールにも全く問題がないわけではありません。先ほど学校制度をご紹介しましたが、小学校4年生からあんなにいろいろな試験を受けて、いろいろなコースに行かされて、もちろん「負け組」というレッテルを貼られます。だからみんな技術教育校 ITE に入るときは、“It's The End”だと思ってしまいます。けれども、そのITEでの取り組みが彼らの意欲と自信を再び高めているのです。しかしながら、そのレッテルがなかなか消えないのも現実です。

それから、シンガポールの学校ではみんなが努力しています。だからテンションが高い。疲れてしまいます。「少し余裕を持って人生を楽しんで」といつも言いたいのですが、ああいう制度によって、努力することがいいことだということが小学校からインプリントされていますので、怠けてしまう



とすごくいけないことをやっているように思ってしまう。だからシンガポールの高校生たちに、日本のフリーターやニートの問題を話すと、みんな「はっ？」という顔をします。ニートはどういう意味か。もともと英語ですけれども、みんなイメージが浮かびません。勉強もせずに、仕事もせずに何をやっているのかと。シンガポールでいえば、ニートやフリーターということ自体が考えられないということです。本当にいいかどうかは、判断が下しにくいですが、一応シンガポールは国として合理的に動いています。でも個人個人の人生から見て、それが最高の人生かどうかは「？」を付けたいところです。

(孫) 案内状の中に書いた通り、100人いれば100通りの教育論があるかと思いますが、私自身も山ほど聞きたいことがあります。1つだけでも禁じ得ないことがあります。

シムさんの発表をお聞きしましたが、私はどうしてそれを「下位校」というのか、非常に不思議に思いました。つまり、下位校と呼ばれている学校では、上位校より倍ぐらい多くの学生が、授業が面白いと感じています。自分で考えたり、調べたり、問題を解決する授業は、下位校でも多いです。そして、先生たちも勉強以外の面で学生のことを気に掛け

ています。だったらどうして「下位校」というのか、逆に不思議に思ってしまう。それは結局、ペーパーテストの成績で上位・下位で決めてしまっているということではないでしょうか。その意味で、先ほどシムさんがおっしゃった、一度レッテルを貼られてしまったらなかなか取れないということは、むしろ私たちの意識の問題、教育に対する意識の問題であり、学校教育のほかにもさまざまな教育の可能性があるのでないかと思いました。

ちょっと余計な口出しをしてしまいましたが、今日は、恐らくたくさん質問があるかと思いますが、まずアンケートに書かれた質問をご紹介しますと思います。

最初は、教育格差と地域格差の関係についての質問です。『『教育県』』という言葉があるように、日本の地方では、高校段階までは公教育の水準が高いのですが、大学進学で都心に流出した人は地方に回帰しません。これをどう考えるべきでしょうか。」もう1つは、エリート教育についての質問です。「勝ち組ほど感謝の念が薄いというのは、ショッキングな話。エリート教育が勝ち組にノブレス・オブリージュの念を持たせることは可能でしょうか」という2つのご質問です。

(佐藤) 恐らく初めの教育格差と地域格差のお話

は、日本についてのご質問かと思えます。先ほどご紹介したSSM調査結果を用いて全国レベルで見ると、進学によって自分の出身の都道府県を離れた人の半分ぐらいがその後、出身の都道府県内へ戻ります。したがって流出は半分です。男性と女性を比べるとUターン率は男性の方が高いです。男性は両親の面倒を見るとか、看取るとか、そういった規範があって、女性はどうせ結婚するのだし、そうしたら一緒に住まないし、というのがあるのかもしれない。

地方の県立高校などでは必ず「東大に〇〇人合格させましょう運動」を繰り返します。しかも同時に、地元で優秀な人材を育てなければいけないという話もします。あまり「東大に合格させましょう運動」をやっていると、地元から優秀な若い人がいなくなってしまうだけです。と言うと、「いや、それを両立させるのが地域の高校の役目である」という答えが返ってきます。その理念は分かりますが、「人間は1人1カ所にしか居られないし・・・」という話をして、最後に笑ったことがあります。

多分これは、今日の地方が抱えているジレンマだと思うのです。進学校としての実績は上げたいけれども、優秀な人は地元に残ってほしい。日本の最近までの政治は、優秀な人が都心に出て、政治家になるなり、大企業の幹部になるなりして、地元にお金を仕送りする、道路を造る、経済を還流させるという形でやってきましたが、それも行き詰まりを見せています。人がどうやって動くのかということと、地域をどうやって維持し、発展させていくのかということは、ワンセットにして同時進行で考えていかなければいけない問題ではないでしょうか。これからの、考えるべき課題をご提示いただき、ありがとうございました。

(シム) 東京23区の面積しかないシンガポールは、地方も田舎もないですし、格差はないです。けれども、大きく見ると、グローバル化の中で人材流出することは当たり前です。やはり、より青い芝生を求めて人が出て行きます。日本国内においても東

南アジアにおいても。シンガポールももちろんそういう問題がないわけではないです。だから、次の僕の研究テーマは、日本のエリート校とシンガポールのエリート校の比較です。第2弾、お楽しみに。

ただここで言いたいのは、シンガポールの場合はとても小さい国ですが、多民族国家でもあります。歴史も浅い。だから、小さいころから愛国教育はもちろんやっています。毎朝国旗に向かってマレー語で国家を歌います。意味も分からなかったのですが、とにかく愛国心です。「シンガポールはあなたにこういういろいろなチャンスを与えてきました。だからもっともっといろいろな社会貢献をしましょう」ということを小さいころから言われ続けてきました。ただ最近、それが少しずつ崩れつつあって、愛国教育が余り効いていなかったという話も出ています。

(山口) 中国は地域格差の問題が深刻です。地域格差というと、農村と都市の格差と、各地域の間、例えば経済発展が進んでいる地域と遅れている地域との間の格差があります。そして、教育を受けることによって、それが挽回できるというのですが、今は、恐らく、それができない状況になってきています。

同時に、中国では教育の産業化が進められています。各学校が、政府からのサポート以外に、自己収入を作って学校として自立して経営していかなければいけなくなっています。そうすると、学費がどんどん高くなるのです。そして、進学率の高い学校とそうでない学校の区別が非常に大きくなっています。そして、そのようないい学校に入るためにはやはり経済力が必要になってきます。学区制なので、いい学校の周りの不動産価格が急騰します。家庭の経済力の格差がそのまま子供の教育格差につながるのではないかとすることは、今、中国でも心配されていることです。

(孫) 2番目の質問は、エリート教育が勝ち組に、ノブレス・オブリージュの思いを持たせることが可

能であるかという質問です。

(シム) 可能としましょう。私はエリート教育を受けました。その後シンガポールで国家公務員として8年間働いて、十分貢献したかなとは勝手に思っています。シンガポールの教育省で、担当していた仕事がまさに技術訓練の学校でした。当時は本当に使命感を持っていました。

周りの友達を見ていると、ほとんどがシンガポールにいるし、いろいろな貢献をしていることは確かです。なぜかという、まずシンガポールで大学に入れるのは2割しかいないので、給料が高い。国としての魅力もある。だから止まる人が多いです。日本の場合でも、県ごとに、県としての魅力、ふるさと意識をもっと高めれば、田舎に止まるかもしれないし、帰ってくるかもしれません。それは一概には言えません。本人の選択です。

(佐藤) ここにいらっしゃる方は、多分今日話に出たような、「教育の弱者」、「負け組」ではないと思います。ここにいらっしゃる方が勝ち組だとしたら、こういうチャンスを与えてくれた社会に対する感謝をしなければなりません。それと同時に重要なことは、負けている人、自分たちより弱い人というのが、社会の中にたくさんいるということを知ることが大事だと思うのです。

日本の場合は高校の段階できっちりとした序列があるため、各高校内には均質な生徒が集まります。したがって、各高校ごとに、生徒たちの家庭的背景が均質になってしまうのです。つまり、極端に言えば、ホワイトカラーの子どもばかりがいる学校、ブルーカラーばかりの学校ができてしまうということです。このため、序列のいずれの段階の高校に通っていようとも、生徒たちは、自分と似た人ばかりで社会が構成されている気がしてしまっているのです。特にホワイトカラー層ばかりしか知らない人たちは、ブルーカラーがいて働いているという実感がほとんどありません。何となくテレビの向こう側ぐらいの感覚だと言えます。私も東京生ま

れですから、農村の生活実感は分かりにくいところがあります。農業で働いている人たちは何で困っているのか、何が欲しいのか、そういうことに想像力がいかないところがあるのです。社会を構成しているさまざまな人たち、そしてさまざまな物や暮らし方を、教育の中で伝えられるようなことができれば、そして、そうやって想像力を鍛えていくことが、エリートになった人にとっても役に立つ、或いは感謝の気持ちを持つことができる、そういうことにつながるのではないかと思います。

(山口) 私は中国のエリート教育を専門にしていませんので、簡単な感想だけを述べさせていただきます。

出稼ぎ労働者の子どもたち、農村の子どもたちが非常に質素な環境の中で勉強をしているということの一方で、中国の都市部ではものすごい競争の中で勉強をして、大きなストレスを抱えながら勉強をしている子どもたちがいるのです。社会のエリートになっていくのは、恐らくその子たちの中の一部です。それから、ごく一部ですが、粗末な環境の中で勉強をしていた農村の子どもたちもなっていくこともあります。

北京大学や清華大学は中国の誰もが認めるエリート校なのですが、その学生の戸籍は、8割5分から9割ぐらいが都市の出身者だと最近いわれています。やはり、そういう学校に入れる教育をできるのは都市の学校だということになります。最近も「NHKスペシャル」で紹介があったのですが、都市の子どもたちは、ものすごいストレスの中で勉強しているのです。というのも、国有企業が倒産した、リストラに遭ったなどということで、親たちは自分たちの将来が見えない。子どもにはこんな苦勞をさせたくないということで、とにかく勉強するしかないというふうに育てるのです。

子どもはストレスを受けながらも、親の期待を感じますので、ものすごくよく勉強します。しかしながら、そうやって勉強して将来良い大学に入れたとして、何のおかげで自分が成功したのだろうと考え

るでしょうか。自分の努力ということが、まず1つ来ると思います。それから、両親のおかげということも多分考えると思います。社会によって育てられたということをどれだけ感じるのだろうかということ、少し心配になります。

(孫) 佐藤先生のご報告を聞きまして、私は、勝ち組ほど自分の得たものが全部努力の成果だと正当化することは少しも不思議ではないと思いました。これは教育だけではなく、社会のあらゆる差別構造の中で、マジョリティーは常に自己正当化をしているのです。そうでなければそういう差別構造も恐らくできないのではないかと思います。

では、山口さんへの質問をご紹介したいと思います。中国における教員の資格取得制度を教えてください。また、農民工学校には十分な教員がいるのでしょうか。教員の待遇はどのようなのでしょうか。

(山口) 中国の義務教育段階の教員資格は、県レベル（日本の県のさらに下のレベル）の各地方の教育委員会で許可を出します。その教員資格を持った教員がその県の中の学校で授業をするという形です。出稼ぎ労働者の子どもの学校である民工子弟学校の場合は、物理的にその地域を離れていますので、都市で教員の募集がされています。中心になる教員（校長）は、その学校原籍地の農村から出てきた人が多いのですが、その場合は教員資格を持っていません。自分の知り合いをある程度農村から呼び寄せて、同じ学校で教員をしてもらうということのほか、教員が足りなくなった場合には、例えば上海にある学校であれば上海でほかの教員を探します。その場合は、教員の資格を持っている人が応募してくる場合もあるし、教員資格がない人の場合もあります。無認可の学校ですので、教員の資格がきちんとあるのかどうかは完全に保証はできないという状況です。

(孫) また一言補足しますと、これは単純に農民工子弟学校だけの先生たちが高い学歴ではない、或

いは免許がないというだけの話ではないです。実際中国の農村において、地方政府が建てた学校はごくわずかなのです。多くの学校は実は農民たちが自分たちでお金を出して造ったわけです。そこでは、この村の中学を卒業したなど、少し知識を持っている、或いは少し学歴のある人たちが教員として働いたりしています。農民たちから、わずかのお金をもらっていたわけです。国からは給料をもらっていないというケースも多いです。そしてその中で、実際小学校3年生の学歴しか持っていない先生が、小学校2年生の子どもたちを教えていることもあるそうです。

では次に、また山口さんへの質問です。ご発表の出稼ぎ子弟の問題では、中央と地方の関係において、中央がコントロールを強めるという方向で対応しているわけですが、それ以外の問題領域では中央と地方という観点で考えると、どのような方向性なのでしょうか。

(山口) 教育制度をつくるときに、各政府の間で分担がなされました。大学以上の高等教育は中央政府が実施するように決めたのです。そして、高校教育は、県レベルの政府が実施する。そして義務教育、中学と小学校の部分については、一番基層にある郷鎮政府が責任を持って実施するという分担を行った時期がありました。義務教育というのは自分たちの地域の子どもたちを育てるとい、地方の力が強いという形で始まったわけです。

そのような制度になったのは、初期には経済的な制約があったからです。国が全国の子どもたちを教育するためにはたくさんの資金が必要であり、難しいので、まずは地方に代理でやってもらうという形を取ったわけです。中国の場合は恐らく教育制度だけではなくて、ほかの部分でも現実的に解決するために、まずは地方の力を使います。必ずしも最初から中央集権の制度ではなかったと思います。ただ、近年、税金の徴収方法を変えました。それまでは税金のうちかなりの部分が地方に入るといいうシステムだったのですが、中央に入る部分を増や

して、中央からもう一度地方に分配するという制度を取ってきています。

そうした一環として、義務教育の問題も、地方に任せているだけでは限界があるということで、地方の力で十分に教育ができない地域については、中央からも財政支援をしていくという形に改めてきました。そういう意味では、今までなかったものがある程度利くように、中央コントロールが働くようになってきたという見方をすればいいのかなと思います。

(孫) 次にシムさんへのご質問を紹介したいと思います。シンガポールの下位校の特徴について紹介していただきましたけれども、さまざまな努力で得られた結果はこの報告の中でデータとしては示されていたでしょうか。

(シム) データは示しましたが、早過ぎて見えなかったかもしれません。まず、アスピレーションが跳ね上がったこと、学習意欲が上がったことは非常に大きいことです。いつも日本の問題を指摘して申し訳ないですが、日本の場合は学力低下というよりも意欲がないのが問題なのです。「頑張ってもどうせ駄目だから」という雰囲気、毎回調査をしにいくたびに、本当にボヨ〜と漂っています。

シンガポールの場合、なぜ元気があるかということ、「頑張れば何かいいことがある」、「保証される」と生徒たちが感じています。今日は紹介しなかったのですが、就職率はほぼ100%近いです。もちろんこれはシンガポールの経済もノリノリだからで、本当に頑張ればいい就職ができます。シンガポールの学校は就職の斡旋はしません。イギリスと同じように、毎週土曜日に「リクルート」という新聞が発行されます。この中に求人広告がいっぱい載っています。求められる学歴、成績、条件、給料、すべて書かれています。例えば技術教育の出身なら1200ドル、高卒なら1300ドル、大卒なら2400ドル。すごく格差がありますけれども、シンガポールで暮らしていくには、たとえ一番下の学校を卒業

して1200ドルの月収でも全然やっていけます。これは教育の問題というよりも、経済も社会福祉も給料など、全てを含めた社会全体の構造です。9割の人が住んでいる団地が非常に安いのも、貧困層をなるべくなくするという努力をしてきたわけです。

それから、生徒が先生を高く評価していることは非常に大きいと私は思います。尊敬できない先生ならば、私も勉強したいとは思いません。授業が面白いというのも非常に大きいと思います。全部その結果が意欲につながっていると思います。その比較対象として日本の下位校を出したわけです。だから学校での取り組みが結果につながると発表したつもりです。もし不明なことがあればここでお詫びします。

(孫) よろしいでしょうか。フロアから何か質問がありましたら、今受けたいと思います。

(ナリン) 面白い発表ありがとうございました。私は2点質問があります。

冒頭で出た話しですが、平等な教育機会を与えるだけで全部問題が解決するかというと、そうでもありません。だからニートという問題が発生していると思います。社会のどこかに何か問題の要因があると思うのです。だから日本のように平等の機会が与えられても、そういう人ができてしまう。すごい英才教育を受けても、冒頭に今西さんがおっしゃっていた、ホームレスを除去すれば社会がきれいになるという、ずれた発想が出てきます。ニートの問題について、どういうところに問題があって、どういうことをすれば直るのか、簡単でいいので教えてください。

あと、時間があればですが、次の問題は、僕の出身のスリランカのことです。スリランカでは、みんなに平等に教育の機会が与えられているのです。教育は大学まで全部無料です。教育費が全く掛からないのです。でも教育格差というのはすごくできています。僕が思うには、チャンスを与えるだけでは意味がないと思うのです。そのチャンスに手を出せない、チャンスにリーチできない、チャンス

恵みを受けられない何かがあるのです。だからチャンスの恵みをみんな受けていないのです。何か方法があれば教えていただきたいです。

(佐藤) 教育も受けなければ、訓練もしていないし、働かない。私の同僚の玄田さんという人がニートの本を出しました。その後同じく同僚の本田さんという人が、『「ニート」って言うな!』という本を出しました。

イギリスのニートは確かに学校にも行っていないし、働いてもらえないし、トレーニングも受けていません。日本の場合、少し時期はズレますが、ニートとは全く別の問題として、引きこもりという現象が出てきました。自分の部屋に入ってしまった



て、社会的な接触をしない。この引きこもりというのは、一種の精神疾患として扱われるわけです。精神科医の方で、半年以上社会的な接触を持たない者を「引きこもり」と定義しましょうということにはなったのです。確かに引きこもりは勉強もしていないし、働いてもらえないから、ニートに含まれるのですけれども、精神疾患ではなくて何もしていない人もいます。日本では、引きこもりとニートの問題が偶然重なってしまい、結果として混同されて語られることが多いので、これは注意しなければいけないと思います。

精神疾患の場合、人間とのコミュニケーションがうまく取れなくなってしまったある種の病気なので、これは病気の問題として考えたいと思うのです。病気ではないのだけれども何もしない。これはどうしてなのでしょう。だって、勉強もしないで、

働きもしないで、時間だけあって、どうやって毎日楽しいでしょうか。なぜそうなってしまうのでしょうか。これは、例えば、本当は働きたいのだけれど、就職試験の面接に行ってもずっと落ちてしまって、そして面接に行かなければ働けないのだけれども、もう次落ちるのが怖くて動けなくなってしまうなど、社会で一步前に踏み出すことができない状態の人が多いのではないかと言われています。就職試験に失敗する、面接に失敗する、そこからそういう状態になっているということが明らかな場合は、そ

ういう人たちに對してきちんと支援をしてあげる必要があります。なぜニートになっているのかという原因が分かれば支援もできます。本人は「この状態ではつまらない、何かしたい」と思っていて、実

は何かしたいのですが、「できません」と言う。なぜできないのかという自己分析ができるようなら、きっと面接にもそんなに落ちないのですが。こういう場合には家族や周りの人が、なぜ一步踏み出せないのかということ、本人の責任にしないで、支援をする用意があるというシグナルを出して上げる必要があると考えています。失敗に弱いというのも、今の日本の若者の特徴だと言われています。失敗によって自分が傷ついてしまうのが怖くて、もう1回チャレンジしにくいという、社会の問題でもあると思います。

(シム) 僕は、ニートが悪いとは思っていません。かわいそうだと思います。せっかく生まれてきたのに、家に引きこもってはもったいないと私は思います。こんなにたくさん素晴らしいものがあるのに。

もちろん教育だけでは解決できません。それは政治、経済、労働市場、家庭環境と、いろいろな要素が絡んでいます。ただ、教育というのは、皆さんが社会に出る前の準備期間です。学校にいるうちに手を打たないと、出てしまっただけでは手遅れです。だから、学校が果たすべき役割は非常に大きいと思います。

もちろんニートが多いということは、日本という社会がそれだけ豊かになったという証拠でもあります。80万人のニートを抱えても破綻しない社会、すごく豊かです。ただし、50年後、100年後にどうなのかというのが、今の問題意識だと思います。今はまだ大丈夫です。シンガポールについては恐らくニートがいては抱えきれないです。

(具) シムさんのご発表を非常に興味深く拝聴しました。シンガポールと日本を比較するのは、シムさんが条件を挙げたように非常にいいことだと思うのですが、基本的に規模が違うのです。都市国家であるシンガポールと、1億3000万人もの人口がいる、面積もそれなりにある日本とは、二項対立のように比較するのはちょっと限界があるのではないのでしょうか。

たまたま言語政策関係の英語の本を読んでいて、シンガポール編があったのです。それで最近シンガポールの事情がいろいろ分かってきて、非常に興味を持つようになったのです。シンガポールは都市国家で、かなり計画化された国家ですが、いろいろなキャンペーンをやるのです。S G E M (Speak Good English Movement)、L S E (Local Standard English) というシングリッシュに対する標準英語、正しい英語のキャンペーンをしています。人口は今400万人ですが、これから主に中国とインドの人を呼び込んで、将来的に600万、700万と計画しています。天然資源に乏しい国で、果てしない成長を成し遂げようとする国だということに、ある意味格差が存在するのではないかと。経済成長の下で、中国人もインドの人も、シンガポールアイデンティティーによって基本的にまとまっていると思うのですが、もし経済成長が終わった

ときに、今の日本のように「失われた10年」などといわれた場合、シンガポールアイデンティティーはどこに行くのでしょうか。

(シム) シンガポールはキャンペーンが大好きな国です。多分社会主義の中国よりも、いろいろな恥ずかしいキャンペーンがあります。スマイルキャンペーンとか。一番僕が恥ずかしいと思うのは、「ラブ・デイ」といって、愛を語りましょうというキャンペーンです。バスに乗ると、ハートの形のチョコを配ったりしています。大きなお世話です。本当に大き過ぎる政府、それはもちろん駄目だと思います。

今日のフォーラムでは、極端に大きい国、中、極端に小さい国の事例になりました。もちろん比較学において、2つの国を比べるときは、宿命としていろいろ違って当然です。文化、習慣、民族構成など。でもそれを言うては何の比較もできなくなります。

今日は、国の規模に関係なく、共通する問題があるということを示しました。下位校の問題は、国の規模に関係なく、1つの取り組みとして参考になればと思って、いろいろな比較をしてきました。

シンガポールの経済がうまくいかなかったらどうなるのか。それはすべての国に共通するものだと思います。アメリカも落ち込むと、いろいろな膿が出てきます。確かに、シンガポールは、今、経済がナンバーワンです。そして、教育は経済に関連しています。だからITE、ポリテクのコースは、いつも経済にリンクしていて、常にカリキュラムを更新しています。古い講座は全部捨てていきます。周りの国もすごく頑張っていて、単純労働型の仕事は人口の多いインドネシアとマレーシアでも行っています。だからITEも下位校ですけども、レベルをどんどん上げていかないと追い付かれてしまいます。それはシンガポールの宿命で仕方がないのです。僕たちシンガポール人は、常に頑張っていないと追いつかれてしまうということを中学校から学んで、自分の国の限られたところで頑張るしかないと教わります。もうサバイバルです。

(佐藤) シムさんは今日、日星比較という形で報告してくださいましたけれども、実は、私は、今日のご報告の基になる研究の論文を読んでいます。シンガポールの教育制度を説明していただきましたが、学校教育期間中、しょっちゅう統一テストが行われています。そのたびに、下のコースになる生徒は、いつも「あなたは勉強ができないのね」と言われているわけです。試験の結果に基づくコースのシステムによって、シンガポールの子どもたちにレッテルを貼るといふか、自分で自分を落ちこぼれだと思ってしまうようになっていきます。その学校の最後の段階の I T E が、そのような子どもたちを元気にするのは、そこまですべて何度も何度も勉強ができないとされてきた子どもたちが、元気になる学校という点は、強調する意味があると思うのです。日本の場合は、高校受験で試験を1回しかやっていません。高校受験の前に確かに模擬試験などがありますが、それはただの練習です。高校受験ではうまくできない—不合格—ということが決定する前、本当はうすうす分かっているのだけれども、それまで手を打たないのです。試験があり過ぎるのも問題ですが、試験がなさ過ぎるのも問題だろうと私は思っています。

(宮崎) 私は75歳です。今日は、日本の高校或いは若者に対する教育の問題を伺って、いろいろ考えさせられました。若者のニートの問題や引きこもりの問題には、やはり今、若者たちが自立できない、或いは自己実現できないという環境の中に置かれているということがあるのではないかと思います。70年代のモラトリアム時代が過ぎれば、社会も変わるだろうと言われていました。それが急にグローバル化が進み、むしろ逆に、若者の教育期間が非常に長くなってきました。教育期間が長くなるというのは、家や社会に依存して、なかなか自立しようというきっかけが得られないということなのです。このように、大きな社会の仕組みの変化によって、若者たちが自己実現、自立できないところに今いろいろな問題があります。

今日は高校というある一定の成長過程で比較し、いろいろなビヘイビアの問題が議論されたと思います。しかし、もう少し別の角度からアプローチしてみてもいいのではないかと思います。それは、アジアの中で持っている1つの文明・文化の中、たとえば儒教や論語、日本教といわれるような、そういう共通した文化という中から、自立や自己実現の問題を考えてみたらどうかと思います。今の資本主義経済、市場主義経済の中で、モノ、金でしか人間が判断されていません。負け組・勝ち組というのは競争社会の論理であって、教育の現場で使う用語ではないと思うのです。もっと人間中心の教育、人間中心の経済と言われているものがあるはずで、東アジアの文化・文明はそういう共通したものを持っていると私は思うのです。これからフォーラム等で発表いただくときに、そういう視点からの議論があってもいいと思いました。

それから中国のことですが、私は昨年北京に行って、民工或いは打工子弟学校を少し見てきました。今の民工子弟学校は非合法的な学校ですから、固定戸籍法が変わらない限り、オリンピックが済んで、上海の博覧会が済んだら、今都市にいる農村から出てきた子どもたちは、みんな追いつ返されると思うのです。一方で、1人っ子政策の中で農村の労働人口が減ってくるということも非常に心配しています。北京大学教育学部の学生と話す機会がありましたが、今の中国のこのような現実を見て、非常に批判的に考えていました。自分たちは北京大学で教育を受けても、農村に帰って、農村の教育をやらなければ中国は駄目なのだと、ある意味で大きな夢を語ってくれました。こういう若者もいるので、今の民工子弟学校などがこのまま続いていくとは私は思いません。固定戸籍法が発動され、今都市に来ているあれだけの出稼ぎの人たちはみんな農村に帰されていくだろうと思います。そうすると、そこで農村の教育が変わってくるのではないかという感じがしました。

(山口) ご質問、コメントをどうもありがとうございます

います。私は出稼ぎの問題をずっと見てきていますが、今まで出稼ぎは拡大の一途でしたから、これが一気になくなるということは考えにくいのではないかと思います。戸籍によって人に対する差別があるというのはもちろん大きな問題ですが、今の中国にとっては、すぐに戸籍制度をなくしてしまうのも難しいと思います。しかしながら、徐々に緩和される方向にあります。戸籍を一気になくす前に、まずは戸籍がないと受けられなかった義務教育の問題、社会保障の問題などを戸籍と離して、だれでも受けられる方向にしていこうという流れが今あります。中国も人が自由に動ける社会になりましたので、今の戸籍制度は明らかにうまくいかないのです。ただ、制度自体が変わっていくのは、さらに少し先のことなのかなと思います。

(佐藤) アジアに共通な教育の理想のようなものはとても難しく、現時点では適切な答えを出すことができなくて申し訳ありません。今後、考えていきたいと思います。ただ、教育の問題は世界的に共通する部分もあります。したがって、「アジア特有の」という問題の立て方が正解を得るために適切かどうかという点は検討した方がいいだろうとご意見を伺いながら考えておりました。確かに若者が自立するのが難しい時代になっていて、教育を受ける期間が長くなることによって親に経済的に依存する期間が長くなっています。特に日本の場合は高等教育の費用が高くて、それを全部親が出しているということが大きな特徴です。例えばスリランカのように高等教育の費用を国が全部出す場合もありますが、普通はなにかしらの分担があります。家計が全部負担する日本は珍しい国と言えます。そういうことを考えますと、高等教育の費用負担の在り方を変えることによって、自立のしやすさ、自立への構えのようなものを変えていくことができるかもしれない、そういう意味からの研究も必要であろうと考えております。

(劉) 山口さんにお尋ねしたいと思います。意地

悪い質問になるかもしれませんがご了承ください。というのも、今日の発表をお聞きして、問題の所在がどこにあるかよく分からないのです。つまり、義務教育の格差を通して何を皆さんに提示したいのでしょうか。

私は義務教育の格差を考えるよりは、むしろ教育の格差が社会的な格差に直結するときの危険性を考える方がいいのではないかと思います。教育の格差を山口さんはどのように定義していらっしゃいますか。学校の校舎を増設するとか、或いは子どもたちに教育の機会を平等に提供するとか、そういうことに限ってでは真の問題の解決につながらないのではないかと思います。

なぜこの意地悪い質問をするかということ、たまたまここで取り上げられたのは、小学校とか中学校とかで、逆に問題が見えにくくなるのです。教育の格差を語るときは、学校教育の近代教育制度という枠を超えて、私たちは何ができるか、つまり、教育の中で何かいろいろやるのではなくて、それを超えて何かするべきでないかという漠然とした感想なのです。

アメリカの教育を振り返って考えると、いい例になると思います。例えば1950～60年代に黒人の平等や教育格差の問題を語る時、黒人のために学校を造ったり、黒人が白人と同じバスに乗って学校に通わせたりするのですが、結果的に見ると、それは彼らの社会的な地位を高め、格差を縮めることにはならなかったのです。もちろん農民校の現在置かれた教育状況を改善することに私は同意しますが、現在の中国についても同じように考えるとき、学校内の格差改善が本当に彼たちの将来の社会的地位の改善につながるかすごく疑問に思っています。

(山口) とても鋭いご指摘をありがとうございます。私がこのテーマを最初に扱ったときは、出稼ぎという経済現象に伴って起きてきた問題の1つとして注目しました。そういう意味で教育の問題として十分に問題の所在を捉え切れていないというのはご指摘の通りです。その部分はせっかくの題

材ですので、これからもう少しきちんと考えたいと思っています。

平等な教育機会を提供すればそれでいいということではないということは、私自身も感じています。というのは、教育を受ける義務だけがあっても、その教育を受けて社会に出たときにどういう結果が待っているのかというのが、それぞれの子どもにとって違うのです。農村での生活と都市での生活は随分違います。教育の意味が見いだせなければ、一生懸命学校に通う気にならないのは当然です。そういったことについて、もう少し詰めて考えたいと思います。ありがとうございます。

(孫) もうすぐ時間が来てしまいますが、どうしてもでしたら最後に一方。

(張) シムさんの熱心な発表に刺激されて、私もつい熱くなりました。私は今、台湾の大学で講師を務めています。しかも日本語学科でベスト3の学校とワースト3の学校、両方を掛け持ちしています。だから今、大学の格差、学生の能力は私が一番わかります。台湾は今、もう大学全入時代に突入しました。去年、台湾の小さな島で大きな衝撃をもたらした教育のニュースの1つは、センター試験で18点でも大学に入れたことです。100点満点でいえば、平均は50点とか60点ぐらいでしたが、一番下は18点で、でも大学に入れたのです。だからもう全入時代です。選択問題ですから、むしろ18点取るのがすごく難しい、なぜそんなに見事に外れてしまうのか、それこそ聞きたいです。

去年までは自分の出身校でも講師を務めていました。主に高度な小説とか現代文学史とか、古典文学の授業を、大学3年生を相手に講義していました。樋口一葉の『十三夜』などを鬼のように読ませていました。

去年9月からは、台湾の南部にある本当に落ちこぼればかりを集めてきた学校で、同じように日本語の授業を持っています。昨日成績を出しました。クラスの半分の生徒を落しました。半年一生懸命同

じように教えても、五十音もまだ覚え切れません。毎日何をしているのか私も不思議ですが、「だって難しいんだもん」「一生懸命勉強してもできません。先生、本当にどうやって勉強すればいいのですか」と、毎日挫折の連続です。片仮名もまだ覚えていないのです。平仮名の50個でも半年ぐらい頭を悩ませています。でも姿勢は真剣なのです。真剣なのですけれども、落ちこぼれになってしまうのです。

でも、みんなくじけないです。大学のエリートばかりの教室に入ると、私はいつもなぜみんなそんな無表情で、先生をそんなに批判の目で見ているのかとすごく不思議です。一生懸命教えているのに、向こうは「何それ」という顔で、エリート校の学生はいやいや聞いているわけです。

でも、落ちこぼれの学校ではみんな目を輝かせて「先生、いつ私たちを連れて日本に行くの」と聞くので「じゃあ、五十音をまず覚えなさい」とか言うわけです。生徒たちが、すごく近づいてくるようになって、私はそこでやる気満々になってきました。

しょうがない学生になぜそんなに燃えなければいけないのか。でも、あの人たちを見たら、自分も仲間由紀恵の演じた先生のようにになってしまうのです。思うに、あの人たちには学力はないですけれども、生きる力はあるのです。みなぎっています。エネルギーです。だから今の格差でいえば、もっと問題のある格差というのは生きる力の格差ではないでしょうか。日本の社会が生き生きしていないのは、多分生きる力の格差なのです。今、表向きのバロメーターとしては、学力の格差で見てもみんな問題視するのですが、生きる力の格差のバロメーターがないです。自分で接触しないと分からないわけです。

だから日本のニートや引きこもりは、生きる力の格差の方がもっと肝心なのだと思います。私は仕事を始めて1カ月目に、落ちこぼれの学校の学生に言われたことがあります。私は日本が長かったから、つい歩くのが早かったのです。気が付いたらみんなが「先生、なぜそんなに急いで歩く必要があるの」「先生、歩きながら考えたりしないの」と言うので

す。「えっ、何を考えるの」「例えば見たり考えたりしないと、面白くないじゃん」。急いで歩くと周りが見えてこないのです。あの子どもたちは、ちゃんとゆっくりと周りを見ながら、ぼーっとしながら考えています。そういう悠々自適な人生もあるのだと、すごく勉強になりました。

こちらが教え込もうと思ったら、かえって教えてもらったことがいっぱいあって、何が落ちこぼれなのか、自分自身が落ちこぼれではないのかなと考え始めました。精神力で落ちこぼれているのではないかと、みんなの行為を見て思いました。

今までエリートコースを歩いてきた人生では味わえない、何か奥の深い世界があるのではないかと思います。逆の意味での、今日の1つの課題として考えたらいいのではないのでしょうか。特にシムさんですね。

(シム) 自分も歩くのは早いのですけれども、ちゃんと人生を考えていますよ。パッションは伝わりました。ありがとうございました。

(佐藤) 私の本務先は東京大学ですが、他の大学でも講義や演習を受け持っています。勉強ができない子どもであっても、パッションがあって、生きる力があってというのだとバランスが取れていると思うのですが。残念ながら日本の場合、学力のない子の方が、さまざまなことに対して「えー、何それ、役に立つの」という感じです。学力のある人たちの方が「面白いですね」と多様な興味を持ってくれます。その辺が日本特有の問題ではないかと、今お話を伺いながら思っていました。

(孫) ありがとうございます。最後のコメントを聞きまして、本当にいろいろと考えさせられました。確かに学校教育の格差と考えると、まず思い浮かべるのは成績です。子どもたちは成績がいいか、学力があるかどうか。そして、今日山口さんが提示してくださった、例えば設備が整っているかどうか。学校の先生たちはどれぐらいの学歴なのか、ちゃん

と免許を持っているかどうか、そういうことばかりに気を取られてしまいます。でも、例えば農民工の小学校と公立小学校の子どもたちが、それぞれ勉強が面白いと感じるかどうか、考えたり調べたりする勉強が多いと感じているかどうか。子どもたちはろくにテキストもいすも机もないけど生き生きとして勉強しているかどうか。お互いに助け合う精神が養われているかどうか。そういうことを比較する人はいないですね。そういうことをぬきに、農民工子弟学校と公立学校の格差を考えてしまっているのです。

その点で考えると、やはり私たちの頭の中に、今日、佐藤先生が根本的に問題として提起されたように、「学校教育は、生まれによる格差をなくしてしまおう装置」というふうに思い込んでいるところがあるような気がします。今の農民工の子どもたちがみんな経済力を持って公立学校に入れば、問題は解決するのか。そうではなくて、その子どもたちは、シムさんや佐藤先生が提示された今の日本が直面している学校教育の問題に、同じく直面するのではないかと思います。その意味で発言をととてもありがたいと拝聴しました。

時間になりましたが、最後に先生方から一言お願いします。

(シム) これから懇親会がありますので、そこでまた熱く語りましょう。最後に話したいのは、自分のスタンスは本当に変わっていないということです。究極な話をしますと、いい学校は放っておいても大丈夫です。国を問わずいい学校なら本当に放っておいてもやっていけます。一方、日本とシンガポールにおいて、下位校、学力のない学校は、いろいろな問題を抱えています。特に家庭環境など、本当にびっくりするぐらい共通しています。だからそこに手を打たないといけません。学校を出て社会に出してしまうと、社会問題になってしまいます。もう手遅れになってしまいます。それが、今日の小さなまとめでした。

(佐藤) 小さなまとめは、多分大変大きな課題だと思います。内容はシムさんに言われてしまいましたので、省略いたします。

(山口) 本当にいろいろなコメントをいただきましたが、その通りだと思います。民工子弟学校はいろいろな社会の矛盾が集まっているところなのですが、確かに本人たちはすごく楽しく学校に行っているのです。やはり子どもは親と一緒に住むことがすごく重要です。都市に行っても学校に行けないのではなくて、どんなに粗末な学校でも行くところがある。毎日通える学校がある。すごく楽しそうに通っているのです。今後は、都市の公立校でこういう子たちを受け入れていくようになるので、中国社会にとってまた1つ大きな挑戦になるのではないかと思います。ありがとうございました。

(孫) 私が農民工学校、子弟学校の可能性を見直そうと思っているのは、ほかでもなく私自身6年間の小学校生活のうち2年間は3つの学校で「借読生」として通い、あとの4年間は子弟学校だったからです。今日私の司会ぶり、少しでも認めてくださるのならば、子弟学校や公立校以外の学校の可能性、教育の可能性も信じましょう。

以上で今日のパネルディスカッションを終わらせていただきます。長い時間どうもありがとうございました（拍手）。

講師略歴

■ 佐藤 香（さとう・かおり） Sato Kaori

東京生まれ。日本女子大学付属高校卒業。その後、東京工業大学工学部を経て1999年3月に同大学大学院社会理工学研究科博士課程修了。同年4月より東京工業大学大学院助手、2003年より東京大学社会科学研究所助教授。博士（工学）。立教大学・武蔵大学・関西国際大学等で非常勤講師をつとめる。日本社会学会・日本教育社会学会・日本高等教育学会・関東社会学会に所属。主著『社会移動の歴史社会学——生業／職業／学校』（2004、東洋館出版）。共著書に『希望学』（玄田有史編、2006、中公新書ラクレ）、『こんなに役立つ数学入門 高校数学で解く社会問題』（広田照幸・川西琢也編、2007、ちくま新書）など。2008年1月には共著書『日本人の意識と行動』（谷岡一郎・仁田道夫・岩井紀子編、東京大学出版会）が刊行予定。

■ 山口真美（やまぐち・まみ） Yamaguchi Mami

千葉県生まれ。一橋大学社会学部在学中の1997-1998年、中国上海市の復旦大学へ留学。1999年に同大卒業、東京大学大学院総合文化研究科修士課程に進学。2000-2001年、北京市の中国社会科学院附属大学院社会学研究科へ留学、2002年東京大学同研究科博士課程進学、日本学術振興会特別研究員を経て2004年よりJETROアジア経済研究所研究員。主著は中国留学時のフィールドワークを下に執筆した『『民工子弟学校』—上海における『民工』子女教育問題』（『中国研究月報』2000年631号）、「中国都市インフォーマルセクターにおける地方出身者の就業構造—北京市廃品回収業の事例を中心に—」（『アジア経済』2003年第44巻第12号）、「西南農村の就労構造と出稼ぎ支援政策」（岡本信広編『中国西南地域の開発戦略』アジア経済研究所、近刊）等。

■ シム・チュン・キャット（沈 俊傑） Choon Kiat Sim

生まれも育ちもシンガポール。1987年シンガポールの国費留学生として初来日、日本厚生労働省の総合職業能力開発大学校で教育工学を専攻し、学士号を取得。帰国後、シンガポール教育省・技術教育局で7年間勤務し、政策企画およびカリキュラム計画を担当。2000年日本外務省の国費留学生として再来日、東京大学大学院教育学研究科で比較教育社会学を専攻し、2003年に修士号を取得するとともに、同研究科の博士課程に入学。渥美国際交流奨学財団の奨学生（2006年度）を経て、現在サトー国際奨学財団の奨学金を受けながら学位論文審査中。

論文『高校教育における日本とシンガポールのメリトクラシー～選抜度の低い学校に着目して～』が「リーディングス日本の教育と社会—第2巻 学歴社会と受験競争（本田由紀・平沢和司編著、2007、日本図書センター）」に収録。

あとがき

シム・チュン・キャット

東京大学大学院教育学研究科博士課程

第30回SGRAフォーラムは、素晴らしい晴天に恵まれた2008年1月26日(土)、東京国際フォーラムG610会議室にて晴れ晴れと開催されました。「教育問題」が世間やマスコミを賑わしている昨今のご時勢において、「教育における『負け組』をどう考えるか～日本、中国、シンガポール～」という今回のフォーラムは非常にホットなテーマであると言わざるを得ません。SGRA「グローバル化と地球市民」研究チームが担当する6回目のフォーラムとなりますが、一般的な教育問題を扱ったフォーラムは初めてだそうです。

発表者および発表の流れは以下の通りです：

- 【発表1】 佐藤 香 (東京大学社会科学研究所准教授)
「日本の高校にみる教育弱者と社会的弱者」
- 【発表2】 山口真美 (アジア経済研究所研究員)
「中国の義務教育格差～出稼ぎ家庭の子ども達を中心に～」
- 【発表3】 シム・チュン・キャット (東京大学大学院教育学研究科博士課程)
「高校教育の日星比較～選抜度の低い学校に着目して～」

基調講演を担当していた佐藤先生は、まず近代教育システムの特徴を説明しつつ、日本の教育モデルとメリトクラシー (meritocracy 能力主義) の現実を明らかにした後、日本におけるメリトクラシーの緩和および教育弱者の厳しい現状について説明しました。そして、教育弱者が社会的弱者になりやすい傾向の中で、彼らが社会に拡散してしまう以前に教育現場において集中的に支援を行なったほうが効率的であると主張しました。非常に濃い内容を簡潔にまとめられた佐藤先生の発表が素晴らしかったこともさることながら、SGRAフォーラムの講演者としては初めての着物姿もとてもステキでした。

2人目の発表者であった山口さんは、中国の都会に住む出稼ぎ労働者の現状とその子どもたちの教育問題に着目し、中国における義務教育の格差問題について報告しました。山口さんはまず中国の教育制度と各教育段階の就学率の推移について説明し、経済発展が著しい中国において国内出稼ぎがどのように発生・拡大していったのか、そして出稼ぎ家庭の子どもが義務教育を受ける権利がいかに草の根レベルでの解決によって制度化されるに至ったのかを詳述しました。データと写真を表示しながら、丁寧にとつ力強く中国の教育現状を訴えた山口さんの発表はとても印象に残るものでした。

最後の発表者の私は、日本とシンガポールにおける選抜度の低い学校に焦点を当て、教育の「負け組」への両国の対処のあり方を比較しながら、教育が果たすべき社会的役割について検討しました。日星両国の高校生を対象とした質問紙調査のデータをもとに、私はまず両国ともに選抜度の低い下位校には学力も出身階層

も低い生徒が集まることを示したうえ、シンガポールの下位校生徒が、学校の授業や先生を高く評価し、高い学習意欲と進学アスピレーションを持っているのとは反対に、日本の下位校生徒は授業や先生に対する評価が低だけでなく、意欲にも欠けていることを明らかにしました。そして、日本の下位校の厳しい現状に言及しつつ、どの国でも下位校が教育的・社会的セーフティネットとなるべく、下位校への投資と改革が急務であると強く主張しました。

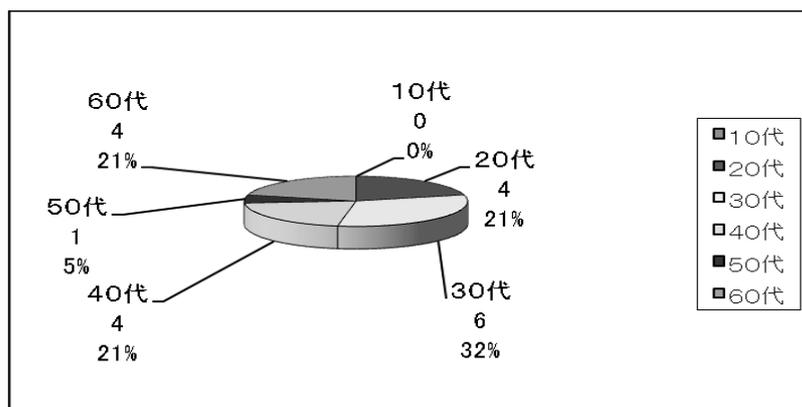
「教育問題」は非常に身近でホットなテーマであるだけに、フォーラム当日には会議室の席がほぼ全部埋まるほど参加者が集まりました。パネル・ディスカッションのときも、フロアから質問とコメントが引切り無しに出され、会場は盛り上がりました。教育弱者への支援の重要性について意を同じくした参加者もいれば、学力以外にも「生きる力」を柱とした教育の必要性を強く訴えた参加者もいました。教育のあるべき姿を考えるヒントとして、自国の教育制度や自らの体験を熱く語ってくれた参加者もいました。そして、ディスカッションの熱気は冷めることなくそのまま大盛況の懇親会へと持ち越され、最後の最後まで熱い議論が交わされた一日となりました。

アンケート結果

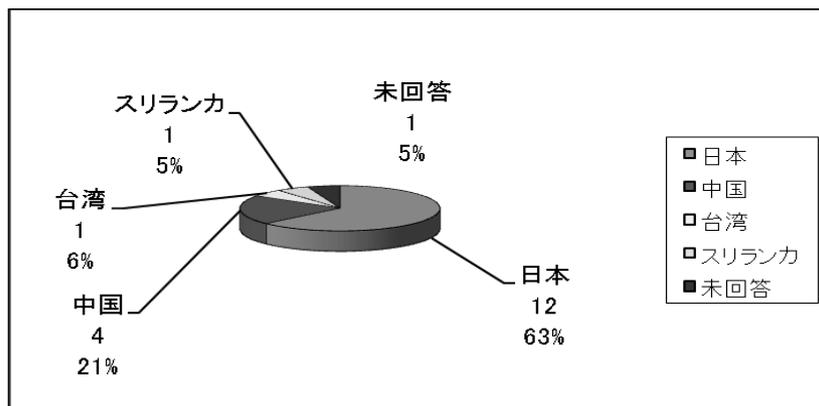
第30回SGRAフォーラム

教育における『負け組』をどう考えるか
 ～日本・中国・シンガポール～ に参加して

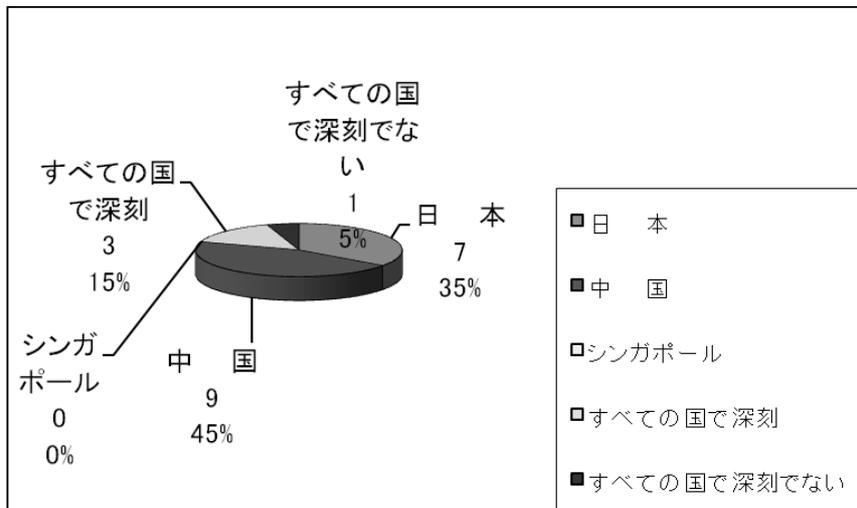
A. 回答者の年齢



B. 回答者の国籍



1. 教育における『負け組』の問題をめぐって、今日の発表にあった国の中でどこが一番深刻だと感じましたか。



【理由】

- ・ 経済用語を広く用いて教育問題を論じること自体に問題がある。
- ・ 「人間教育」の視点を明確にして問題に取り組む。
- ・ 物、金、中心から“心”の問題を。
- ・ 金の問題が同時に発生している。
- ・ 政府が無能。
- ・ 日本における下位校が名実ともに低いことが問題だと思う。
- ・ 「時間的」なステージは異なるが、それぞれに同じ作用（力）が働いていると感じる。
- ・ 経済的理由によって高等教育への進学が最も阻害されていると感じた。
- ・ 現時点で〔義務教育〕就学率の低さ。
- ・ 政府は当該問題をあまり重視してない。
- ・ 教育の施策が確立していない。中国の場合これに加えて財政的な問題。
- ・ 教育を受ける以前の家庭教育が成り立たないので人間としての生長が守られない（人としての）。
- ・ 公正、平等の社会を目指すために教育の問題を深刻に受止める必要があるからです。
- ・ 中国ではある意味で「公教育制度」あるいは「公教育思想」がまだ確立していない。
- ・ 教育における「負け組」の問題や教育格差に関する問題などは1つの国に限られてる問題じゃなくて、現在各国に存在する問題で重要視しなければならないと思う。
- ・ 一番基本的な義務教育も保証できない人が多いから。

2. 今日の発表の中で一番印象に残ったことは何ですか。

- ・北京で（首都なのに）子弟学校から卒業証書が出ないこと。
- ・シンガポールの賞の制度。励まし、認容の考え方。
- ・シムさんの発表は大変面白かった。日本とシンガポールの教育の違いが判りやすかった。下位校に対するシンガポールの手厚さ、日本も見習って欲しい。
- ・シンガポールの下位校への取り組みがすばらしい。日本の下位校にも良い教師を送るべきである。
- ・個人のおかれた経済的・資産的環境が、教育環境に非常に大きな影響をもたらしていること。
- ・シンガポールの教育制度
良い人をもっと良く、悪い人をもっと良く → 日本も参考にしてほしい。
（学歴エリート） （非学歴エリート）
- ・シンガポール下位校の特徴（他2名）。
- ・どちらの国も皆平等な“Chance”をあたえていても、その“Chance”を個々に生かせない要因を考えるべきだなあと思いました。
- ・シンガポール政府による下位校への支援。
- ・教師の熱意が必要。
- ・教育に対しての思いは国を問わずどこにでもあるのだということ。
- ・教育の格差に関する問題を皆で考え、それに向ける解決策を探るのはとても大事なことだと思います。しかし、なまぬるいアドバイスや中途半端な提案はかえって真の解決策にはつながらないのではないかと思います。
- ・社会的弱者が社会に拡散してしまう以前に教育弱者に対して集中的に支援したほうが効率的であること。
- ・シンガポールのITEのことを聞いて本当に感動しました。今日本でも中国でも「負け組」は個人の責任という考え方があるけど、シンガポールのような教師の積極的な指導によって、学生の勉強意欲を盛りあげる必要があると思います。

3. もしあなたがあなたの国の文部省・教育省の大臣だったら、教育の『負け組』に対してどのような対策を打ち出したいと思いますか。

- ・「教育貯蓄基金」制度。
- ・長期的に安定した生活基盤を持たない若者、少数のニューリッチの対極に貧困の中で危機感を持たない若者が増大している現状を認識すること。
- ・自立しない、人間関係がうまくいかない「ひきこもり」若者（社会的弱者）と言われる若者に対する政策を即急かつ明確にうちだし、超党派で取り組む政策を立てる。
- ・負け組の人達に対して、学校教育の段階からシンガポールの先生のように、勉強だけでなく、家庭の環境まで踏み込むようなきめ細かな対応が必要だと思う。それが社会に出ても貢献する形になると思う。
- ① 資源投下の方法とルール作りから修正。
② 実態についてのいろいろなデータをキチンとした調査に基づき収集する。
- ・シンガポールのような取り組みをしたい。現在は教師の質の低下も問題だと思うので、教職取得方法など人間性も含めた人材を養成することが急務と思う。
- ・「受験技術の取得」とは対極にある技術（それが何であるかは即答できないが）が取得できるような教育のしくみ、内容。それぞれの個人がもっとも感心を持っていること、興味のあることのみで卒業単位が取

れること。

- ・日本においては意欲があれば、経済的理由は二義的な問題になると思うので、「学習意欲」を上げるための取り組みを行なう。
- ・下位校への投資と改革。中高時代に早く手を打つ。
First, a deep investigation should be carried out to remove any reason why people cannot have the merits of “equal chance”
- ・義務教育の最初の段階から手厚い支援。
- ・「学べば道が開けている」という信念を全ての人が持つこと。
- ・①資格取得のための費用を国が援助、②資格が多い人は就職口の斡旋とか紹介とか、③「勝ち組」にはボランティアを経験してほしい。但し“義務”とか“単位”にはしない。この人達は「単位取得」が得意だから。
- ・教育の格差の問題は非常に複雑で様々な要因が絡んでいると考えられます。しかし、現在、もしかしたら私たちはその問題の所在自体も分っていないのではないかなというような気がしています。
- ・「逆差別」政策、つまり「負け組」にならないように優遇したら？
- ・やはりお金が出ないと支援できない→そのために教室の無駄使いを減らすこと。まずは社会の合意が必要！！
- ・学校の授業のやり方から変える必要があると思う。ただ知識を与えるのではなく、学生達の自主性や創造性を生かせるようにしたほうがいいと思う。
- ・確かに私が学生時代にはあんまり学習意欲がなかった。それは将来が見えないからだ。もっと学校が将来の進路を学生たちに説明することが大事だと思います。

4. そのほかにご質問やご意見がありましたら、裏面にお書きください。

①教育格差と地域格差の関係について

日本の地方では「教育県」という言葉があるように上位校においては高校段階までは公教育の水準が高いと思われるのですが、大学進学で都市に流出したまま地方に回帰しない。これをどう考えるべきか。

②エリート教育について

「勝ち組」ほど感謝の念が薄いというのはショックな話。エリート教育が「勝ち組」に Noblesse Oblige の念を持たせることは可能でしょうか？

・山口さんへの質問

中国における教員の資格取得制度を教えてください。又、民工学校には十分な教員がいるのでしょうか。教員の待遇は？

- ・中国の出かせぎ子弟の問題では、中央／地方関係において中央のコントロール（もしくは地方を越えた、という意味での「中央」）を強める方向で対応しているわけですが、それ以外の問題領域ではコントロールの方向性と強さは、中央／地方という観点ではどうなっていますか？
- ・「シンガポールの下位校」としてあげていたことによって結果がもたらされていたことは、この報告の中ではデータとして示されていないかと思われるのですが、いかがでしょうか？

SGRALレポート バックナンバーのご案内

- SGRALレポート01 設立記念講演録「21世紀の日本とアジア」
船橋洋一 2001.1.30 発行
- SGRALレポート02 CISV 国際シンポジウム講演録「グローバル化への挑戦:多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高偉俊、F. マキト、金雄熙、李來賛 2001.1.15 発行
- SGRALレポート03 渥美奨学生の集い講演録「技術の創造」
畑村洋太郎 2001.3.15 発行
- SGRALレポート04 第1回フォーラム講演録「地球市民への皆さんへ」
関啓子、L.ビッヒラー、高熙卓 2001.5.10 発行
- SGRALレポート05 第2回フォーラム講演録「グローバル化のなかの新しい東アジア:経済協力をどう考えるべきか」
平川均、F. マキト、李鋼哲 2001.5.10 発行
- SGRALレポート06 投稿「今日の留学」「はじめの一步」
工藤正司 今西淳子 2001.8.30 発行
- SGRALレポート07 第3回フォーラム講演録「共生時代のエネルギーを考える:ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高偉俊 2001.10.10 発行
- SGRALレポート08 第4回フォーラム講演録「IT 教育革命:IT は教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F. マキト、J.スリスマンティオ、蔣恵玲、楊接期、李來賛、
斎藤信男 2002.1.20 発行
- SGRALレポート09 第5回フォーラム講演録「グローバル化と民族主義:対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林泉忠 2002.2.28 発行
- SGRALレポート10 第6回フォーラム講演録「日本とイスラーム:文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002.6.15 発行
- SGRALレポート11 投稿「中国はなぜWTOに加盟したのか」
金香海 2002.7.8 発行
- SGRALレポート12 第7回フォーラム講演録「地球環境診断:地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. プレンサイン 2002.10.25 発行
- SGRALレポート13 投稿「経済特区:フィリピンの視点から」
F. マキト 2002.12.12 発行
- SGRALレポート14 第8回フォーラム講演録「グローバル化の中の新しい東アジア」+宮澤喜元総理大臣をお
迎えてフリーディスカッション
平川均、李鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟健軍、B. ヴィリエガス 日本語版 2003.1.31 発
行、韓国語版 2003.3.31 発行、中国語版 2003.5.30 発行、英語版 2003.3.6 発行
- SGRALレポート15 投稿「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」
呉東鎬 2003.1.31 発行
- SGRALレポート16 第9回フォーラム講演録「情報化と教育」
苑復傑、遊間和子 2003.5.30 発行
- SGRALレポート17 第10回フォーラム講演録「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石隆、南基正、李恩民、村田晃嗣 日本語版 2003.3.30 発行、英語版 2003.6.6 発行
- SGRALレポート18 第11回フォーラム講演録「地球市民研究:国境を越える取り組み」
高橋甫、貫戸朋子 2003.8.30 発行
- SGRALレポート19 投稿「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」
朴栄濬 2003.12.4 発行
- SGRALレポート20 第12回フォーラム講演録「環境問題と国際協力:COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004.3.10 発行
- SGRALレポート21 日韓アジア未来フォーラム「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」
2004.6.30 発行
- SGRALレポート22 渥美奨学生の集い講演録「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」
明石康 2004.4.20 発行

- SGRAレポート23 第13回フォーラム講演録「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004.2.25 発行
- SGRAレポート24 投稿「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」
フスレ 2004.10.25 発行
- SGRAレポート25 第14回フォーラム講演録「国境を越える E-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F.マキト、金雄熙 2005.3.31 発行
- SGRAレポート26 第15回フォーラム講演録「この夏、東京の電気は大丈夫？」
中上英俊、高偉俊 2005.1.24 発行
- SGRAレポート27 第16回フォーラム講演録「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R.エルドリッチ、朴榮濬、渡辺剛、伊藤裕子 2005.7.30 発行
- SGRAレポート28 第17回フォーラム講演録「日本は外国人をどう受け入れるべきかー地球市民の義務教育ー」
宮島喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴校熙、小林宏美 2005.7.30 発行
- SGRAレポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録「韓流・日流:東アジア地域協力
におけるソフトパワー」
李鎮奎、林夏生、金智龍、道上尚史、木宮正史、李元徳、金雄熙 2005.5.20 発行
- SGRAレポート30 第19回フォーラム講演録「東アジア文化再考ー自由と市民社会をキーワードにー」
宮崎法子、東島誠 2005.12.20 発行
- SGRAレポート31 第20回フォーラム講演録「東アジアの経済統合:雁はまだ飛んでいるか」
平川均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範建亭、白寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006.2.20 発行
- SGRAレポート32 第21回フォーラム講演録「日本人は外国人をどう受け入れるべきかー留学生ー」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向
東、角田英一 2006.4.10 発行
- SGRAレポート33 第22回フォーラム講演録「戦後和解プロセスの研究」
小菅信子、李恩民 2006.7.10 発行
- SGRAレポート34 第23回フォーラム講演録「日本人と宗教:宗教って何なの？」
島藺進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャンナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、セリム・ユジェ
ル・ギュレチ 2006.11.10 発行
- SGRAレポート35 第24回フォーラム講演録「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ
行くの?～」鈴木進一、間宮尚、李海峰、中西徹、外岡豊 2007.3.20 発行
- SGRAレポート36 第25回フォーラム講演録「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007.4.20 発行
- SGRAレポート37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張潤北、徐向東、孫建軍、朴貞姫 2007.6.10 発行
- SGRAレポート38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録「親日・反日・克日:多様化する韓国の対日観」
金範洙、趙寛子、玄大松、小針進、南基正 2007. 8. 31 発行
- SGRAレポート39 第26回フォーラム講演録「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住真、韓東育、趙寛子、林少陽、孫軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRAレポート40 第27回フォーラム講演録「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャー・ムシカシントン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRAレポート41 第28回フォーラム講演録「いのちの尊厳と宗教の役割」
島藺進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャンナ・ムコパディヤーヤ 2008.3.15 発行
- SGRAレポート42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録「黄土高原緑化協力の15年ー無理解と失
敗から相互理解と信頼へー」
高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRAレポート43 渥美奨学生の集い講演録「鹿島守之助とパン・アジア主義」
平川均 2008.3.1 発行
- SGRAレポート44 第29回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」
関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ 2008. 6. 25 発行
- SGRAレポート47 第32回フォーラム講演録「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水諭 池田慎太郎 朴榮濬 劉傑 南基正 2008. 8. 8 発行

☆ レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel:03-3943-7612 Email:sgra.office@aisf.or.jp) へご連絡ください。

S G R Aレポート No.0045

第30回S G R Aフォーラム

教育における『負け組み』をどう考えるか～日本・中国・シンガポール～

編集・発行 関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8 (財) 渥美国際交流奨学財団内

Tel : 03-3943-7612 Fax : 03-3943-1512

SGRA ホームページ : <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール : sgra-office@aisf.or.jp

発行日 : 2008年9月20日

発行責任者 : 今西淳子

印刷 : 藤印刷

© 関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ね並びに引用の場合はご連絡ください。

